

川

柳

の

証

麻生路郎 主宰

二月號

Pensoj flugas trans la land-limon

春早き厚生境 南紀熊野路へ

南海電車



山手線阪和天王寺ヨリ直通列車毎日運轉

麻生路郎著

新川柳評釋

|| 苦笑と哄笑で人生勉強 ||

堺市出島海岸通二丁一八二番地

發行所

不

朽

洞

電話大阪三〇三九二番

★定價八十錢(送料六錢)
★海外註文は送料實費加算を乞ふ



船の旅

大陸は招く

満・支・蒙への

OSKライン



— 是進書内案 —

大阪商船

ムツワイニペン



書きよい
錆びにくい
強い
安い
廉價

新製
バンフレット
御車越次第造呈

大阪 大橋 井筒 商店



路郎居 雜感

(一)
臨時中央協力會議で山本有三氏が假名の呼稱を改めることを提案されてゐる。

日本精神が説かれると、急に「バット」を「蝙蝠」と變へたり、「チエリー」を「櫻」に改めるやうな小手先の仕事と違つて、山本氏の主張には根底があるだけに双手を擧げて賛成出来る。

「假名」といふのは「假りの文字」といふ意味であつて、この文字の持つてゐる立派な性質をきつつけてゐるばかりではなく、今日の日本の通用文字として、適當な名稱とは思へない。殊に、今日の支那では「假」といふ文字は「偽」といふ意味であるから、國語の海外進

出には、たちまち支障を來す譯である。
それで、日本が創案した日本固有の文字には、その名まへの中に「日本」といふものが宿つてゐてほしいから適當な名まへを選んで貰ひたいといふのが提案の趣旨であるが、この案が實現すれば、ホントの日本語が、多く使用されるやうになり、面倒な漢字が多分に整理されるので教育方面の能率もウンと昂揚せられるであらう。

日も早く實現されて所謂假名交じり文なども、漢字交じり文と改稱される日を期待して止まない。
私は古くから、川柳の評釋や句作に關する諸問題を説く時には必ず、この假名の問題を採りあげてゐることを忘れたかつたし、この假名の音の硬軟から、それ等の假名の堆積によるリズムについて語つたものである。
今日、山本氏が特に假名についての改良論を知つて大いに欣快とし、且つ賛意を表するものである。

(二)

五萬三千石が潰れるまでは、誰も彼もが口に忠義を唱へ、身を鴻毛の輕きにたとへてゐたので、ホントに誰が忠義なのか、不忠義なのかハッキリした目やすがつかなかつたに違ひない。従つてホントの忠義者が不忠義者のために口先では、やりこめられてゐた事もあつたであらうと思はれる。が、しかし、五萬三千石があんなに脆く潰れたとなると、不忠義者は俄に周章狼狽して利己主義や個人主義を遺憾なく發揮し、殿様の非を鳴らして何處ともなく退散、世間にあつた醜體を曝露してしまつた。
近ごろの柳界に、これに類した醜體が、あちこちに見うけられるのは甚だ遺憾である。

表紙……(慈顔)……福井哲	川柳寫真……八步・哲
路郎居雜感……麻生路郎……(一)	ス・フ入りの兒……小山文三……(二)
月川柳一ト筋……路郎・柳・紫・白柳子……(三)	評……複難怪奇な人間生活……浅田一……(五)
武玉川四篇研究(五)	森本塵山……(一)
隣組(其の五)……水車……(九)	

奥村丹路論……高鷲亞鈍……(二)	與太話……小畑自由朗……(三)
狸(續)……前田五健……(三)	柳世界史(二)……戸田孤蓬……(四)
歩行ぬ舟……黙然人……(五)	貝洲雜記……岡田某人……(四)
滿洲雜記……湯淺小坡子……(四)	黨篇たつた一言……小畑自由朗……(六)
川柳旅で家……蛭子省二……(三)	蛇隨筆(其の三)……柳路……(六)

近作柳樹……麻生路郎選……(六)	川柳塔……麻生路郎選……(六)
同舟近詠……諸家……(四)	同圖書館……麻生護乃選……(八)
集看護婦……北川春集選……(八)	各地柳壇……(一〇)
川柳協……柳界展望……(九)	後記……(二九)……社關係の人々……(三〇)

村奥

丹

路

論

高
鷺

亞
鈍

I

I

いつも綺麗に頭髮を分け、剃刀のよくあつた端正な貌、色白く、顔色の眼鏡の底に柔和な瞳がある。背はそれ程高くないとしても貴公子のやうに典雅な容姿は、最早諱へない育ちの良さと豊かな教養を示してゐる。彼は偶に自宅へ客を招くと角帯を締めた和服姿で現れる。その小さな格好のよい口元から出る軽い大阪辯はフランス語のやうに優美である。近代的な大阪の若旦那、奥村丹路氏は斯のやうにして登場するのである。

彼は昭和三年頃から川柳を始め、路郎師の門を叩いたのは昭和五年、つまりわれ／＼の「川柳雑誌」に投句し出したのはこの年からである。今、僕の机上に彼から借りたスクラップ・ブックが載つてゐるが、つく／＼その一人の作家を年代を追ひ、纏めて句を詠むことの如何に愉ししかを知つた。殊に彼の現在に到る作句経験の十年餘りは、年齡的に言つて青春躍動の期間でもあつた。學生時代、卒業、就職運動、就職、結婚、新婚、そして纏て親となつた現在の彼は漸く一通りの人間生活を経験した卅二才の大人に成り済ましてしまつた。川柳を始めた昭和三年では彼は未だ十九才の紅顔の少年であつたのに。其間、K學院大學高商部を卒業した年の昭和六年、彼は廿三才で嚴父の逝去に逢つてゐる。反面、この十年間に於ける邦國の内外共に多事多端な期間も亦なかつたであらう。昭和初年頃の赤化思想による當時の學生の動搖、國內

不景氣による就職難、虛無的思想、滿洲事變、五・二五事件二・二六事件の澎湃として勃る日本主義、支那事變等、吾々國民凡てが経験したことを丹路氏も亦体験したのは當然である。川柳がその時折の御時世を詠むものである限り、丹路氏の句が、如何に自己の心境を吐露する主情を歌つたものであるとしても、その影響の受けぬ筈はない。

僕は今、こうして奥村丹路論を書きつけてゐるが、然し一休それは作家論としてか、人物論としてか。作家論であるなら、作品に重點を置くべきであら、作品に重點を置くべきであり、人物論の場合は、人物に重點を置いて作品は從でなければならぬ。だが作品と、人物と融合混一するところに川柳人ととしての奥村丹路論が成立するな

ら、これは甚だ厄介な仕事である。

而も彼が既に過去の人物であるなら、飴ん坊はどうだつたとか、六厘坊がどう、或ひは彼と母校を共にした、異才愚陀等どうにでも書けるであらう。然し彼は今尙健在であり、明日にでもヤアと言つて肩を叩き合へる友なのである。假令、句を引用するにしても逸話めいたり、思ひ出話にして／＼するものではない。其處で僕は、句を年代的に並べ逐次的な批評とか感想を述べるといつた採香臭い方法を採らずに、先づ彼の作品から一句を拾ひ上げるであらう。そしてその句から類推して他の句を取り上げ、取り上げた句の類推を別の句に及ぼし、斯くて、彼の句の傾向と、獨自性、乃至は

彼の性格と態度に言及し、以て奥村丹路論を冷やかしのにせず、何處までも、彼の眞實面に突つか／＼つてゆきたいと希ふのである。そこで彼の句を拾ふ場合、必ずしも年代を追ふものではないとしても多少とも僕の觀點が、主觀に提はれるなら、それは作家に責任を問ふ可きでなく、批評する者の罪であり、而し乍ら其れ故に作家論も亦創作であり、文學であり得るのであるといふ事もお斷りして置きたい。

II

丹路の手は柔かく白く、そして美しい。拳固を硝子に打つつけ、その血みどろの掌に硝子の破片を握る不逞なものが川柳人にあるとすれば、丹路はその逞ましきよりも、先にその無智を

そのあくどい卑らしさに響感するであらう。彼の手は無疵であり、生活の胚豆がない。彼は減多に硝子を突破るやうなことはない。彼はそつと硝子に指頭を當て、自分の息の曇りに字を書く。或ひは頬を寄せ、口唇を當てる。川柳が現實を對象とするなら、丹路は斯る態度をもつて現實に寄り副ふのである。そこに彼から逞ましい生活体験の句が見出されないとしても、彼は硝子を拭うてゆく生活情操を詠む。彼の睿智は、そのまゝ硝子の冷たさに觸れ、指頭はそれ故に孤獨を身に泌みて感じるのである。而も彼の手は、外に向けては、あれ程勞はり、護るのに、逆に内省する時の手は、自嘲と、苛憤にさいなまれない日はなかつたのである。こゝに彼の自己葛藤と相剋を感じるのだ。

例へば彼は已が手の女のやうに繊細であり脆弱であることを誰よりも一等よく自分が知つてゐる。

女みたいな手をは知られまいとする (昭和八年)

しかしその女性的な彼の手は世間に對する男性故に抱く羞らひであつたとしても、それを譬つとみた女性か、カフェーの女

であれば、それは素性の良さを示す羨ましい華車な手に映るであらう。

てのひらにはてのひらの柔さありき (昭和十年)

彼は其處で掌の柔さを自ら肯定する。世すぎ生活に荒れてゐないこの掌を、自分の幸せに握り抱くものであつたか、或ひは彼の前に現れる女性の掌の柔さ



(影攝的) 奥 丹 路 氏 近 影

握力つよくおろかしき手に母のみ手 (昭和五年)

漸く少年期を終へた廿一才頃の彼の此句は、老けゆく母の御手に思はず知らず強く握りしめ、母親から離れたくない腺病質な少年のいぢらしい心情である。既に昭和五年と言へば彼の學生生活の最後の年であるなれ

を念ずる氣持であつたか、一日彼は掌に美しいイマジユをゑがくのである。それは取りも直さず、彼自身の環境への愛着でなくて何であらう。彼はしかしその手の愚しさを自覺する。何故なら彼の手の柔さも、尊い母の庇護なくて、いづれ庇護なき時の一人歩きする場合、彼の不安は募らないとも限らないから

青白い手の幸福に堪え切れず (昭和五年)

凡そこの句ほど、その頃の彼の心境を卒直に吐露したものはない。環境と生活に對する自己の心理的トラブル、僕はそれをこの句から今少し丹念に解剖してみたいと思ふ。何故なら、彼の句の多くはそういつた内省的な相剋によつて、單に神經質な坊ちやんでなく、人生への眞實の探求に向ふ良識を問ひたいからだ。さてこの句を解り易く左に分析してみる



(イ)の圖の說明「先づ青白い手とは換言すれば生活無能を喰はれた大學出の當時の高等ルムベンの同義語であり、それはインテリの自嘲である。それ故に青白い手は、作者丹路の自嘲であつて否定的なものである。その青白い手の幸福に——と幸福と言つたのは丹路自身の環境に對

する肯定である。一般に青白い手のインテリは、親が苦面して大學まで出し、高給を取つて今度は親に貢がなければならぬ時に失業して、親を扶けるどころか自分自身の生活もなく、前途の希望も理想もないシエストラ的虚無に彷徨し、寧ろ學校出が呪はしいものに思はれて、それは決して幸福とは言へなかつた。然し丹路の場合は、そうではない。丹路の環境の良さは當時のインテリの生活難を外に、教養を受けた幸福に満足するばかりであつた。然しそれに堪えきれない、とあるのは始めて彼の環境が、彼のひそかに懐く、思想の持つ厳しさから堪え切れないものを持つたのだ。即ち彼は意識的に環境を否定しやうとするのである。

(ロ)の圖の說明「(イ)の場合には青白い手の幸福——といった工合に幸福(肯定)のための青白い手であつた。さて(ロ)の場合には青白い手(否定)の、幸福に堪え切れずであつて、幸福に堪えきれないものがあるといふ意味に解し得られる。故に堪え切れ(否定)のための青白い手

であつて、それは否定の否定である。

(一)の圖の説明「そこで(イ)の圖は、青白い手(否定)を肯定しやうとする我が身の幸福を祈らうとするところに自己の心理に圖らずも矛盾を感じ、葛藤が生じ、懷疑を持ち、堪え切れぬ焦燥を懷く。この彼の環境を肯定し或ひは否定する、その時折りの句を拾ふ事は興味がある。

例へば昭和八年の句に
あゝ太陽に手をさし伸べし
たわけ
(昭和八年)

がある。たわけと名詞止にしたのは深い意味がある。あゝ太陽に手をさし伸べし—までは彼の直い感情であらう。だが、この邪氣のない感情を、殊更にたわけとことわりしてこの句の腰を碎いて分別臭い韻をひよつくり出したのは問題が隠されてゐる。或ひは彼の直い感情は性來のものではあつたらう。然し彼の直い感情に、ある思想性がふと影を射したとすれば、あゝ太陽—はある意味を持つ、と同時に青白い手の自覺は既に太陽につん伸べる手ではなかつた。そこに作者は自己矛盾に逢着する。

この場合作者は早朝に起き、たまさかラヂオ体操をした句か

も知れない。簡単に太陽へ向け

てさし伸ばしたのは反射運動であり、その限り己が手は忘れてゐる。それがその儘であれば問題は無いとしても、作者は此處で川柳として採り上げるのに、たわけと事理けした時最早、作者は叙上の如き心理錯綜に陥り太陽に手をさし伸べしする殊勝らしさに不圖、照れ臭さを持つたのである。彼はたゞ分相應に手を焙りながら思へば事おほし
(昭和八年)

に身の安定と、思索に耽る日も持ちたいのであつた。然し彼の思索も所詮は儚ない蜘蛛の巣のやうに美しいけれど怪しい懷疑の糸を網み、而も、
懷疑慮無主なき蜘蛛の巣となりぬ
(昭和六年)

でこの句に示す主、即ち作者自身を逃がしてしまふ全的な自己否定を試みるかと思ふと同じ年、同じ月の句で

寝汗かくよな御身分して
(昭和六年)

と半ば自己とその環境を肯定してゐる。但しこの年の作者は學校を終へ恰も就職もせず浪々の生活裡に、加ふるに嚴父の死去に遭遇してゐる事を知つてこれらの句を味ふ可きであらう。

斯くの如く、彼の作品は、一句の中に肯定と否定の矛盾を胎

み、且つ一句一句比較しても肯定の句もあり否定の句もある。

それは彼の自己分裂を、態度の不鮮明を咎めるといふよりも、彼自身の持つ自己反省、それは必然的な相剋故に人生への眞實一路の旅なれば(白秋の詩の一節)でなければならぬと信ずるのである。

次に(ロ)の圖は、(イ)の圖が一見自己矛盾であるとすればこれは自己安定である。(ロ)が否定の否定といふ解釋が成り立つ事は既に否定に終始した作者のエゴを逆に肯定することになる。

それはある種の諦念であり、考へやうによれば冷酷な自虐性であり反面彼の純粹性を意味する。悟りが、煩悩は煩悩のまま救はれるとするなら、彼はそれ故に、川柳への求道によつて救はれるであらう。彼は自己揚棄することによつて、彼の實存的な存在もあり得るわけである。

拳握りしめしはボケツトの
中なりき
(昭和六年)

よし槌を握り、鶴嘴を振上げる拳でなく、それが、己がボケツトに忍ばした空拳であるとしても、その自己否定は丹路の正着な姿であり、冷えてゆく職のない手にも秋陽の慈光は彼にも

翳るのである。

秋の陽へまだ職のない手が冷える
(昭和六年)

そして此時、彼は最早、堪え切れない青白い手をつた學生の頃の杞憂がそのまゝ實現しても、その不安とか焦燥に身を凝つてゆく姿は川柳によつて尊く現れ、やがて彼は就職につく者に軽い嫉妬を覺えるうちに、彼も亦結局手近な實兄の會社にサラリーをとる身になつたのである。

就職の説ひしたゝめるかる
きしつと
(昭和八年)

とあるから、彼自分はまだ學校を卒業して二年後になつても就職してゐないやうに考へられる。或ひは就職した作者に學友の寄せた祝文に軽い嫉妬めいたものを感じたといふ意味にとれぬこともないといふればこの句を持つて彼の就職した年を決定するのは早計であるかも知れない。然し、その翌年、

サラリーの日割かんせうな
どすまじ
(昭和九年)

といふ句があるから、何れにしても、昭和八、九年前後に就職し、現在の學校出のやうに卒業前から就職口が定まつてゐる程景氣の良い話はなく、卒業後二、三年は遊んでゐたものと考へられる。それは昭和六年の、前に引用した句をみてわかるのである。(こんな事は本人に直に訊けばすぐ判る事で、最初警戒した通り抹香くさい丹路論になりさうだから、この邊で項を更めやう)

以上で大体僕は、丹路の手の句を藉り、そして丹路の肉體のつながりである手から感じる彼の内外の生活を及ばず乍ら検討した。次回は又別の面から彼を考察し、以て彼の全貌を描出すと共に彼のオリヂナルな川柳壇の位置を確立し意義づけたいと考へる。

Sata Special Klinik

内科

診療時間
午前 午後
午後 午後

加藤謙一
電話 1151

呼吸器病科

診療時間
午前 午後
午後 午後

佐多愛彦
電話 1151

入西北所留停町中島堂電市

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂坂大

複難怪奇な人

間生活

浅田 一

一

近江八幡でメンソレータムを作つて賣出してゐる近江兄弟社の人々は皆眞面目なクリスチャンだ。其一人M君が細君の縁の婆さんの孤獨になつたのを引取つて養つてゐる内細君が死に、其婆さんは生れもつかぬ盲目となつた。子供の面倒を見てもらつてゐたのに今度は女中を置いて婆さんの世話まで焼かねばならぬ事となつた。友人が同情して後妻を持てと勧める。話は半分進んだが七十三歳の件の婆さんが反對する。内氣なM君迷つて友人に相談する。遂に結婚の前日天理教會へ預ける事となつたが、其日早朝其婆さんは腰紐を頸に七周させて前で男結びに結び、左側臥位で自殺した。法醫學を知らぬ醫師が二人検屍して右耳から血が一線顔を横ぎつて鼻の下で合し左口角で枕を汚してゐるのと、顔の眼の周りに皮下出血があるのとから他殺ときめてしまつた。只輪結びの所がゆるかつたのを異としてゐた。法醫専門の大學教授が來て之亦この二醫師と同様に他殺とし

た。M君は被疑者として曳かれた。M君は初は抗辯した。遂には觀念して自分は罪が深いと友に書き送つた。司法官は之を明白と解してゐる。裁判所の忙がしい時期だつたのか豫審に廻されてから半年間呼出されなかつた。其間に早く服罪してしまひたいとも思つたものか豫審廷で検事局での記録通りに自白してしまつた。裁判所は自白を非常に重大視する。懲役七年となつた。控訴院亦然り。所で上記他殺の根拠とせられてゐるものは自分で絞頸しても發生し得るのである。稀な現象ではあるが自他爲鑑別の根拠にはならぬ。紐は他爲では七周もするものではない。結び目が男結びで頸に喰ひ入る様に締つてゐたが遊離端を引くとスツと抜けた。自殺ではキツク締める間に氣を失つて輪結びの所に力が入らなくなるが、他殺ではこゝに最も力をこめる筈だ。検事の調べでは顔を踏んだり蹴つたりしてグンニヤリしたので犯人が左手で婆さんの頭をかゝへ、右手で腰紐を解き頸に七周したとあるが、右耳

からの血が下方に流れず左口角に流れてゐる。Mは犯人でないから控訴院廷で少しも懸憫を乞ふ様な態度に出ず傲然としてゐたので判事の心證を害した。大審院は法律上の手續の下落がなければ却下する。結局M君は無辜で懲役七年に服せざるを得なかつた。我輩はM君の親友N君に頼まれ野人としてM君の無辜を絶叫したが採用されなかつた。

二

二昔も前の話だが桐原集一といふ海軍主計中佐が恩給生活中火災保険に入つて放火し、保険金をせしめ、共謀者たる一巡査を某山中に連れ行つて殺したといふ懸疑で豫審廷の調を受けゐた。國家改良論とか國家經濟論とか獄裡で書いたのを見ると中々頭のよい男だと思はれる。彼は絶対に自由せざる。答へることの煩はしさに壁を偽し、盲となり、歩行不能となつた。僕は豫審判事からは彼の精神狀態について地方裁判所長三宅正太郎氏よりは彼が眞に壁、盲、歩行不能なりやと問はれた。耳も目も異常なく手足も尋常である。呼吸曲線を取りつゝ彼の犯行の新聞記事を読むと呼吸はビタと止つ

た。數十秒の後呼吸は促進し亂れた。彼に關係なき記事の時は何ともなかつた。之によつて偽壁と斷定した。彼は何を問うてもトンチンカンの返事する。筆談を強要されるのが嫌さに大便を拭いた紙を目にあてがつて結膜炎角膜炎濁を招き、本當に物が見えなくなつてしまつた。偽壁と觀破されても彼は依然答へなかつた。其内結核で死んでしまつた。彼は愛妻家であつた。又一人のヤツト中學生位の目の中に入れても痛くない子供があつた。恐らく恩給が頂けなくなるとを恐れての偽壁であらう。

自殺すればよさうなものと思ふが、扶助料は恩給の半分になつてしまふ。妻子の生活を思うては自殺も出來ず自白は勿論出來なかつたものと見える。自白

愛婦支部長襟巻は賣りました

を過重視するの弊はこんな風に逆用される。

三

女中に手をつけては圍ひ者とするといふ亭主に手を焼いた女房が親族會議を招集し離縁して貰ふことゝなつた朝亭主がヒョククリ戻つて來た。女房が一寸買物に出て牡丹餅をみやげに持歸り亭主に最後の奉仕にとお茶と共に出した。亭主は之を食つて暫くすると嘔吐してそのまゝグツタリとして死んでしまつた。重なる怨を毒殺で復讐したのでらうと誰しも思ふ。僕等は其死体を解剖したが腦に粟粒動脈瘤といふ病變があつて出血したのであつて嘔吐も死も此腦出血の爲で、決して中毒の爲でないことが判つた。

筆者——法醫の權原 醫學博士
八歩 カノヲ 福井 哲



塔 柳 川



—選 郎 路—

兵庫縣 寺井 銳 々

落葉さへ音一つ／＼立てゝ燃え
落葉焚けば父子の話詩人めく
落葉焚いてゐれば借金など忘れ
落葉焚くは昨夜怒つた顔でなし
近々と見れば落葉の火も凄し
落葉掃く素直な心今日も持ち
お茶の宗匠が怒り給はざる
お花の先生へ少女甘えてゐ
ひとり食へば酢蛸つめたきものと知る
錢函の錢で立てゝるくらし也

張家口 岩崎 柳路

足早やに乞食さける支那の街
甘栗の匂ひも暮だ支那の街

布哇 高澤 一浪

頬杖を紫檀まがひと言ふ机
さうなくてならぬ筈だと反る社長
惚れた眼に唯ののんだくれにあらず
花吹雪乙女の頬に遠慮せず
そりやさうだけれどお金も光ります

一代の名士は友の友の友
地位が地位大言壯語とは言はず
聖戦下そこらこゝらの戀をすて
酒やんでしばし静かな一聞なり
夫婦相和し十人目を孕み
案の定ものは相談だがとくる
よく遊ぶ癖あり頭よい友に
肩書がとれて今日から孫の馬

大阪 戸田 孤蓬

年内余日無しすでに羽根の音
晝酒の魅力に坐る三ヶ日
インチキであつても父に喜ばれ

兵庫縣川西町 戸倉 普天

書き初めに遺言状も書いて見る
社長室只ウンウンのいそがしさ
食卓についてもはなさぬハンドバツク
轉勤の米と炭とに氣を配り

本ノルル 前山 北海

瘦世帯切り盛る妻の口達者
受け賣りの新體制が土産談

日系市民廳石スコフィールド兵營入營

同胞の召さるゝ日なり葉狸々
あきらめた兄が生きてた夕刊紙
教へ子の成功人へ觸れ廻り

初日の出洋の廣さへ手を合し

三世の孫も連れ行く初詣
印刷の英文附録孫が讀み
日本のラヂオは樂し寢正月

本ノルル 藤井 友郎

装へる平靜シガーの手が震ひ

サラリーの半は妻の春仕度
風車幼き色をとり合せ
風邪引いてつく／＼ほしくなつた妻

大阪府高石町 米本貴志子

貸し借りもなく十二月あつけなし

日記帖中六十枚はカルテめき

元旦やきのふに續く息を吐き

兵一人送る玄關明け放ち

長崎名譽教授御引退に捧ぐ

打ちやみし鐘の余韻の清らかさ

入れ變へる心を女中たんと持ち

大阪 橋本緑雨

配給を待つ炭代が別にあり

食料の足りぬ都へやれぬ嫁

一時雨バン屋の列が亂れて來

兵庫縣 奥村丹路

本が一冊開かれたまゝ明日になり

姉さんと呼んで親しき人ならず

ともだちの現れては消ゆ雲のごと

わが前の代用食の湯氣を見よ

戀人に問へば湯たんぼ入れて寝る

盥洗をひきよせ我を失はず

知らぬ町道は子供にきゝやすし

下關 多田市多樓

日曜の日のカレンダーは子がめくり

子の軍装母萬歳が言ひたそう

貯金々々まだ算盤は要らぬ額

隣組二人三脚四拾五入

新體制愈々河の水もすみ

ちび下駄を穿いて國債たんと持ち

本心は言はず蕎麥屋へ歩を運び
承知した表情兩袖膝に組む
お遍路が素通りしたはブルドッグ

下關 濱田賢次

七本しかない蛸だから安いなり

御世辭まで言つて月給ほしくなし

首になる前に言ひたい事がある

雲と月人の末路を想はしむ

上品な氣違ひにしてなほ淋し

ある時は貯金の穴を小さがり

干鰯の骨をきらつて都會染み

映画大平屋を觀て(四句)

廣島 大森風來子

結婚といふ切札で座を静め

殺してはならぬと女よくしやべり

戦場に似て郵便を戀しがり

急援の氣笛は女が聞いてゐた

風呂屋から鼻緒のだるい下駄もよし

甘栗は男の方からむいてやり

マスクをさせて密月から歸り

試験台になつたと女くやしがり

岡山 鈴木九坡

青切符結局立つたまゝで着き

もろ／＼の標語が驛で無視される

江戸辯が板につかないまゝで減首

姑娘のあの曲線で撮される

行き過ぎたマスクの人に會釋され

婦唱夫隨悲しき甘黨とはなりぬ

角帯へ意外や揉手よく似合ひ

お世辭言ふ積りで痛いところへ觸れ

警笛へ老婆の全神經あはれ

夕焼へ餘りに細き俺の影
右正にお借り申して春へ居る

岡山 逸見 灯竿

僕の行く鼻先へ来て羽子をつき
正直さ三にて十は割きれず

嘘といふ事のあらはな話しぶり

石鹼の泡と竹馬の友と風呂

哀れさは一つの靴の中に水

鉄瓶の重さ病のまだ癒えず

夜遊の子に使はれる金を溜め

アスファルト駄々をこねるによい所

鏡餅嚴然として割れてゐる

出勤時子に鉛筆を削らされ

俺の行くところの鐘が鳴つてゐる

子の咳に障子の隙間あらんやと

偏食の母偏食の子を叱り

知己もなく髭の手入に興味をもち

口答試問親にすまない事も言ひ

廣島 石原 伯峯

映画大平原を觀て(三)

バツと火を吐くピストルに油斷なし

明日知れぬ命トランブ並べられ

どたん場で女は凄い智慧を待ち

天邪鬼そこに惚れてゐるのが弱味

果敢なさは嗚呼スフ入りの靴下乎

春風と共に轉居の氣も起り

母に爪つんで貰ふも久し振り

大阪 西川 青美

新體制

整理統合しばらくの間だ手術台

大阪 夷 一笑

假縫へふと幻滅を感じたり

節分に嫁かはる人と又出あひ
るす訪うてしばし見て居る晝の月

アトさんへ

レコードは返さず春の禮を受け

詰將棋去年のうらみはらしたり

兵庫縣 水谷 鮎美

病友の手紙は白ろく翻へり

行つてまゐりますと子供の呼吸白ろし

有馬一治

親友と火鉢は温きものと知り

湯のなかであんまを仕合ふおもしろさ

陽が温くいと云へば女中さん笑ひ

大阪 市場 沒食子

除夜の鐘これから風呂へゆくところ

國民服が目立つ翼賛の拜賀式

日記帳くれば去年は風邪ばかり

松之内未だ轉業がはかどらず

奉天 吉田 水車

奉天神社

滿人の目に珍らしきお賽錢

何もかも凍てゝ滿洲春を待ち

甘栗の艶姑娘の春となり

うつかりと花嫁の馬車やり過ごし

大阪 須崎 豆秋

運輸部にゐて腹の立つ松の内

一升の酒をみんなにうらやまれ

カナリヤに留守番さしてどこへいた

大阪府柏原町 宮岡 白峯

人間と云ふは淋しき元旦よ

賀狀一本支那から來てゐる元旦日

初日の出今年には作業服でゐた

醉へば亦君の名を呼ぶ歸還兵
太平洋せまく日米軍事記者

大阪 正本水客

スキ靴白粉萬端用意する
忠義とはやすし貯金に子と出掛け

頂上の萬才おもふ事がなし
閉太鼓みかんの皮を踏んだ聲

看護婦の美しすぎて未だ嫁かず
薄氷立聞をする音になり

當のない旅なら俺もゆくと云ふ

豊中 黒川紫香

貰ひ風呂呂代用食を話して來
國民服一席やりたそうにかけ

大阪 丸尾潮花

強情だつた人も今年は六十二
讀物をかゝへ床屋へ來る晦日

入學へまだ玩具手放さず
戎橋國民服の父と逢ひ

爪切つて男も春の仕度する
大阪へ着く迄女よく眠り

倅なふたりライカーもてあそび

神戸 岡田某人

元旦も寝間着の上へひつ掛けて
元日を豫報無視して晴れ渡り

蛇曰く今日人間に出逢つてね
切れ相なタオルを下げて月へ出る

火の灰となりゆくを見つゝ身じろがず
或る人に近況を寄す

尼崎 酒井斗風

經驗の強みを知つたお元日
三ヶ月過ぎて百圓札くづす
一月四日サラリーマンの血がながれ

正札をめくつて女よう買はず
機影はるかに若き心は燃へる
キリストも知るまいうどん芋の味

大阪 北川春巢

南紀出張

黒潮列車働きに行く人も乗り
手袋で煙草もすへば靴もはき

叔母さんになるのが嬉し女學生
師走半ば表彰されに呼出され

傘さして犬の散歩に出る女中
圖書館の中は少年老い易し

苦勞した手相は醫者にでも分り
お降りの豫報が當り怨まれる

ニュースを切つて常會へ出掛けたり

阪島 濱田久米雄

一列は御婦人用の化粧室
バットの火消えるゝと禁められず

父ちゃんの後へ一列作らされ
一機二機三機新築いゝ眺

祝交作君結婚

二千六百年が出發といふ二人

火の消えた火鉢トンビのまま坐り
病人に訊けば一圓借があり

官幣大社兒の鼻汁を拭いてやり
いさゝかの金策雨のなかを行く

十錢を前後左右を見て拾ひ

小松園、友軒兩氏と伊勢へ詣る

五鈴川園で儲けた顔うつる

鳩々々がうまい具合に退いてくれ
雪つもりもう悪人の影もなし
憂愁のあゝ讚美歌を忘れてた
紀元前幾年からの海水かそも

麻生アート

武玉川四編研究 (十五)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(357) 不孝ハ内の行燈を見す

省二 道樂息子は、夕方から内にゐない。

東魚 赤い灯青い灯ばかり、戀しがる奴。

塵山 名代部屋の行燈と、一夜敵競をする奴もある。

(358) うまひ名の葉に殘たる八重葎

省二 色々な雜草が生ひ茂つて居る。それを八重葎とは妙。

東魚 花もなく名も知れぬ葉が生ひ茂つてゐる様を、八重葎と云へば、何となく越深く聞える。

塵山 優し氣な「八重」を、うまい名と云ふのかと思ふ。

(359) 大黒の愛相盡て年暮ぬ

省二 福の神の大黒は、いつもニコつては居るが、ア、遂に其愛相も盡きて問題の年の暮となつてしまつた(年の市で大黒をぬすみ、開運を期待するのではある)。

東魚 年暮れぬなどと、まじ／＼と云つた處に、却て淡い可笑しさがあるやうに思ふ。

塵山 貧乏大黒ならば、歳暮に盗面を作るであらう。

無盡藏 四時望樓印 申五月改

(360) 五十以上の伽な雪折

東魚 雪折れの音を聞いて風流氣を感じるのは、五十以上の老人の事だ。若い者には、雪折れの音など、別に興を催しませぬ「伽な」は「ときな」であらうか
塵山 前説の如くで、「伽な」は「伽」なる」の略である。

省二 五十以上となれば、雪折れにも無常を感じる年である。「伽ぎな」は軽く解した方がよいと思ふ。深刻に観ずると、雪折竹に本來の面目を悟りなどとならう。

(361) 松に灯先のあたる關の戸

東魚 關の入口に松の太木が、あるさまが想像される。關の灯火がもれて、かどの松に及ぶ光景。「あたる」は灯筋が、恰も老松の幹に當る心持ちと思はれる。
塵山 彼の淨瑠璃(宗清)にある、小幡の新關のやうな情景であらう。

省二 實景だ。

(362) 手を合はても何所をふく風

東魚 頼み入るのを冷淡に、どこを吹く風と、聞き流してゐる場合であらうが前句に照應せねば、その事情が想像出来かねる。

塵山 いはゆる馬耳東風である。

省二 實際に此句の如き場合はある。

往々劇の一幕中に觀る場面だ。

(363) 下加茂の戸に四ツ五ツ餅の跡

東魚 祭に餅でも投げるやうな事があるのであらうか。

塵山 歳暮に掲げた神供の餅を、戸板の上に載せた其の痕である。

省二 戸板に餅をのせた痕のある事を詠むだ古川柳が確に有つたので、探したが今見當らぬ。古俳句には「松の戸や餅の跡みるけさの春」(一之)がある。然し下加茂ときめてある處に、「前句關係かもしれぬが、何にか特別事情がありさうな氣がする。調査致したい。

(364) 卯の花か咲てさくらは闇になり

東魚 櫻は散つて葉は茂り、卯の花が眞白く咲くに對して、實際暗い感じもするのを、闇になりと敘したのであらう。

塵山 初夏の櫻若葉で、木の下闇と成つた光景であらう。

省二 お説通りである。噺家の「葉櫻やまた恐ろしき道と成」は、木の下闇をいつたものの「卯の花は木の下風の櫻かな」(宗因)。

(365) 内では人の譽め吸口

省二 「日本の智恵とおもふ吸もの」(武17)。その吸物の香料として藍の薺や柚子を入れるを吸口といふ。家庭の食膳

に於ては、吸口が氣が利いて居るからとて、改つて譽める程ではなからう。「女の料理吸口はなし」(武6)などは、主婦にまことに濟まぬ句である。

東二 馳走になつた時、吸口など迄ほめれば、いかにも先方の心盡しを、受けとつた心持が現はれる。自分の家での場合には、そんな要はない。

塵山 自己の邸内にある花柚などは、これを賞翫する者は無い。

(366) 六郷様とはかりおほへる

省二 六郷兵庫頭邸宅が、淺草觀音と吉原の間に位するから「品」のいゝ客は六郷様をうり」などと、吉原通ひの句には、この「六郷様」が度々利用される。本句の如く、たゞ六郷様と許り、世人の云ふやうに覺えるのは親しきをもつ。

東魚 六郷様／＼とよく知つてゐるやうに云ふものゝ、六郷何の守と申されたかな、と云はれてみると、はて、矢張り六郷様だなど云ふ様な氣分に、可笑味がわく。

塵山 古川柳には、屢々題材にされてゐる。

(367) 戸板へあたるかりそめの意趣

省二 苟且の意趣返しに、例へば戸板へ石などぶつけてみる。かりそめの戀。東魚 別に深い根のある意趣でもない。戸へ石を當るとか、體でどんと當る乃至は手で叩くなどするのであらう。

塵山 例の結婚當夜の惡戯ではない。

(368) うかいに手問のとれる浪人

省二「うかい」とは？。嗽ひの事であらうが、浪人になつたからとて、嗽ひ位に殊更に手間がとれるといふのは、大ダサ過ぎはせぬか。手間のとれる事は外にあらうなどと、理で攻めてみたところ

で、浪人云、己れは知らぬと。
東魚「嗽ひであらう。浪人でなければ嗽ひの仕度など、腰元なり誰なり世話なしにして呉れやうもの、浪人の身の上、水からして自分で汲まねばならぬ、と云ふ心持ち。

省二「浪人ならば自炊もするであらうし、嗽ひには限るまいと思ふ。

(369) もとの坐敷へ彈ながら來
省二「三味線を——賣ッ妓。

東魚「どういふ場合であらうか。他をすませて又もとの座敷へ、賑やかにさア歸つてきましたと云ふ様に、彈きながら來ると云ふのであらうか。

東山「旗亭に來てゐる藝者であらう。

(370) 膝へ入日のたまる乗掛
東魚「入日のたまる」は、特に目ざしの膝へ強く感じる心持ちであらう。

東山「薄暮に近い街道の松並木らし

い。
省二「夕陽が十分にさす。乗掛へで、あるから景に成る。

(371) 仲人へ次第に細き付け届
東魚「仲人して貰つた當座は、盆暮につけ色々贈物もあるが、段々年たつて疎遠になるといふのであらう。

東山「去るものは疎しといふ俗諺もある。

省二「これは實際世間並みの事柄であ

る。仲々續くものでない。(付け届は中止しても、その恩まで忘れてはならぬ)

(372) 棒つかい心斗の水車
東魚「棒の手をみせるのに、一寸計り水車の如く、棒を扱つてみせるので、手際の片鱗をしめすのであらう。

東山「手早く棒を振廻す態は、水車の轉回するやうに見ゆる。

省二「幼時に棒の手の稽古をみた事があるが、水車の態とおぼしく、棒を廻はすのがある。武術語にも、蜘蛛手、かく繩、十文字、蜻蛉返り、水車といふ。

(373) よろいのわたし手習子乗ル
東魚「茅場町の有名な手習師匠へ通ふ。

東山「此の手習子は、日本橋音羽町(現今は江戸橋何丁目かなる可し)の雷師匠と稱せられた、中興兵衛と云ふ有名な寺小屋に通つたのである。

省二「雷師匠丈に、和顔をみせなかつたといふ。『水入れへ入れて鑑で叱られる』

(374) 妾とまではあててる手の筋
省二「手の筋拜見の上でなくても、一見察しがつく。だから「妾とまでは」である。手の筋などは此の程度のもの。

東魚「一見風俗で知れるのを、手の筋で知れたやうな顔をしてゐる。尤もらしいところに可笑味がうかがはれる。

東山「手相では妻妾の別を斷定する事も出來ず、子供の有無なども詳細に豫知されず、只口から出仕せに云ふのである

(375) 行先に夕めし有て旅衣

省二「夕暮になつての旅行者の心情を「夕飯有て」で十分に現はして居る。(昭和十五年七月號「江戸讀本」誌に三田村鳶魚翁が、食物の話を致して居られる。昔の夕飯に就て知ると、此句にも一層の興趣がわく。)

東魚「夕飯時だけが、旅にあつては落付ける。朝も晝もなにとなくあわたししい心持。

東山「技巧を弄せずに坐五を、「旅衣」と置いたのは大いに可い。

(376) 辻番は南へ向て老にけり
省二「日當のわるい辻番直がたかし」

「辻番の布子は西へ入りたまふ」で、南へ向ては日當りの事。老にけりは、生きた親爺の捨て所だ。

東魚「日當りのよい明るい感じの中に一抹の哀れさが漂ふ。

東山「昔から壯年の辻番人を詠んだ句は無いと思ふ。

(377) 戻る巫女の人に見らるゝ
省二「いと哀れな聲にていちこ云ひ」

で、あゝい職業の女が、口寄せから歸る道すがらは、物見高い人々は出てみるものだ。

東魚「見に出る連中、恐らく口寄せもすつかり壁越しに聞いたのだらう。

東山「巫女はいちこと訓むので、彼女は本業の外に副業もする故、人が眼を時てるのであらう。

(378) 指先へ來る晴天の塔
省二「塔を指し眺める。指月の指だ。

指先へくる晴天の富士など、常にある事

東魚「晴れ／＼した心持ちはうけとれ

る。「指先へ來る」といふ現はし方が、印象強く響く。

東山「如何にも豁然とした風景が想像される。

(379) 田樂法師くらいちらかす
省二「田樂は鎌倉時代に頗る盛んであつたが、遂に亡び猿樂が代つた。「田樂」といひて怪しきやうなる鼓腰にゆひつけて笛吹きて、ささらといふものつき、様々の舞してあやしの男ども歌うたひ」である。あやしの男共だから喰ひ散らかすであらう。

東魚「くらいちらかす」と云つたのでいかにも亂雑な趣が深くうかゞはれる。

東山「くらいちらかす」は、伎藝の事であらう歟。伎藝が變化したのは、田樂のみでは無い。

省二「伎藝の方でなく、食らひの方だと思ふ。

(380) 人に隠して口で七種
東魚「七種を叩くのに、恥しく口の中で歌を唱へながら、叩くと云ふのであらうか。「人に隠して」に、何か意味が外にありさうにも思はれるが、分らない。

東山「人に隠す理由が判明せぬ。

省二「七種を娘は一つうつてにげ」でやはり、恥しいからである。「人に隠して」は小聲の意。

(381) 柱唇は安い一年
東魚「手軽く一年の役にたつと云ふ心持を、「安い一年」と現はしたのであらう。

東山「來年中の御重寶を、四文か六文に賣つたのである。

省二「一年もみるには安し初暦」(宗雨)。「二年をたつた四文で伊勢屋買ひ」

(332) 蠅とり蜘蛛を見出す手枕
東魚 閑寂の中に、一種震じさを感じやうな句である。

壺山 靜中に動を發見したのである。

省二 六月初、某家に行つた時、一寸此句を拜借して「南京虫を見出す手枕」とやつた。臭虫が這つて居たのだ。聊か事變色があると獨り笑つた。——蠅とりくもは又別趣がある。

(333) 勘略の嫌らしい顔の美しき
東魚 妾などであらうか。儉約などは夢にもしない女性。

壺山 家を傾むけ國を傾むける美女。省二 お説通り。算盤高い様では、それが顔にも自ら影響するものだ——「勘略」を用ひた句例。「勘略と大氣の中に母はたち」「勘略にはうり出されし黒小袖」

(384) 高壁をして見たる還俗
東魚 僧籍から又俗に戻つた、忙びた境涯から賑やかな心持ちの世界に立戻つたところで、朗かに高壁にも云ふ気分になる。

壺山 袈裟も法衣もかなぐり捨て、心まで明朗に成つたのであらう。

省二 朝夕、南無阿彌陀佛許りでは陰氣だ。還俗して身も心も共に軽くなり(責任が)、世間的な遠慮も少くなつては自ら話も高聲になる。

(385) 細工か利てあつて六月
省二 「ふたれたやうな六月のなり」武(16)で、六月は暑い。細工が利いて何

年振りの暑さなど聞いた事がある。

東魚 「細工が利いて」はどう云ふ意か。家の普請に色々工風しすぎて、風通しが悪いのであらうか。前説によると、細工が利いて暑いと云ふ地方がある様であるが、江戸で云つたものか私は知らない。

壺山 江戸人は前の如きことを云はぬ「徒然草」に住居の造作の細工に過ぎたるを、見るも面白いと書いて有るが、夏は甚だ暑苦しい。

省二 兼好は、造作は用なきところを造りたる、見るも面白く萬の用にも立ちてよしと。又、家の造りようは夏をむねとすべし、冬はいかなるところにも住まる。暑き頃わろき住居は堪へがたきことなりと。これは此通り拙家など痛感。

(336) 竹の子賣の響る開帳
省二 旬は四月の季。開帳も四月には多くあつた。晴の日の竹の子賣ならむ。

東魚 目黒などが想像される。

壺山 太陰曆の四月頃は、卯の花くだしとて、雨天の多い時であるが、此の句は晴雨に關係はないと思ふ。

省二 いかにも、卯の花腐しであり、筍微雨である。陰晴定まらぬものとされである。

持ちと見て、付かぬの方がよい様である。

(388) 壺山 追附かぬであると思ふ。
寺内の櫓いんきんに買

省二 櫓まで直切れば後家も人の口(武16)であるが、流石は寺内での櫓を値切る者はない。小銭を置いて、いんぎんに求め墓所へ。

東魚 商賣物を買ふといふ気分でない、供へる櫓を分けて頂くと云ふ心持ちである。

壺山 梵妻が内職に賣る櫓であらう。

(389) 日待にも志賀の名主ハ詠たかり
東魚 古き都の志賀で、兎角いまだに歌など好きな者が得であるのであらう。(殊に名主などと云へば、舊家であり人の上に立つ人物であらうから。)

壺山 近江八景が目前にあり、無言でも居られぬとて、燒直し歌や孕み句を出して、暗に鼻を高くするのであらう。

省二 然らむ「日待にも」とあり、「詠たかり」とあるところから察すれば。

(390) 虎か背中へかくす少長
東魚 虎の役者が、十郎役の少長を背へかくす、舞台の仕草を、虎に對して少將ならぬ少長役の十郎をと、軽い口合ひ的に云つたまでではあるまいか。

壺山 此の少長といふのは、寶永年間に蒲事の名人と稱せられた、中村七三郎の俳名で、曾我祐成は彼れが得意の役である。

省二 「川柳江戸歌舞伎」には、「うしろへ」とある。「少長に持たせてみたい虎ケ石」などの句が列むで居る。

(391) 鏡研おのれか良へのし懸り
東魚 磨く鏡にうつる己の顔。その上へ覆ひかぶるやうに鏡を、押さへ磨く趣壺山 寫生の句で、自然の滑稽味があらうに詠まれて居る。

省二 「鏡研にがさぬやうに押へつけ」いゝ加減の年寄のウスノロが多かつたやうに詠まれて居る。

(392) 最う汁椀のひつむ衣更着
東魚 衣更着は如月であらう。正月用に新調した椀も、はやびづみが出たと云ふので、粗末な椀に二月の淋しさが調和する。

壺山 此頃の木椀は粗製濫造で、甚だ速く歪が生ずる。

省二 衣更着はキサラギである。

(393) ほたん貰て置所見る
東魚 華かな牡丹、さて何處を置場所にしやうかと、見廻はす處に、牡丹を大事がる心持ちが見える。

壺山 九尺二間の裏屋ならば、掃溜に鶴である。

(394) 扇子ひらいてほうらいの埃
東魚 蓬萊に埃が掛つたのを、扇子を開いて拂ひ落すのであらう。扇子を開くので正月らしい気分が深められる。

壺山 年玉に貰つた萬歳扇であらう。

省二 萬歳扇なれば一層の興。

(395) 尾のない鶏もかける齋日
省二 夢入の丁稚に對し尾のない鶏とは妙。

(396) 追付かぬであらうか、追付かぬであらうか。同じ様だが多少意味合ひが違つてくると思ふ。もう駄目だといふ心

持ちと見て、付かぬの方がよい様である。

壺山 追附かぬであると思ふ。

(388) 寺内の櫓いんきんに買

省二 櫓まで直切れば後家も人の口(武16)であるが、流石は寺内での櫓を値切る者はない。小銭を置いて、いんぎんに求め墓所へ。

東魚 商賣物を買ふといふ気分でない、供へる櫓を分けて頂くと云ふ心持ちである。

壺山 梵妻が内職に賣る櫓であらう。

(389) 日待にも志賀の名主ハ詠たかり
東魚 古き都の志賀で、兎角いまだに歌など好きな者が得であるのであらう。(殊に名主などと云へば、舊家であり人の上に立つ人物であらうから。)

壺山 近江八景が目前にあり、無言でも居られぬとて、燒直し歌や孕み句を出して、暗に鼻を高くするのであらう。

省二 然らむ「日待にも」とあり、「詠たかり」とあるところから察すれば。

(390) 虎か背中へかくす少長
東魚 虎の役者が、十郎役の少長を背へかくす、舞台の仕草を、虎に對して少將ならぬ少長役の十郎をと、軽い口合ひ的に云つたまでではあるまいか。

壺山 此の少長といふのは、寶永年間に蒲事の名人と稱せられた、中村七三郎の俳名で、曾我祐成は彼れが得意の役である。

省二 「川柳江戸歌舞伎」には、「うしろへ」とある。「少長に持たせてみたい虎ケ石」などの句が列むで居る。

(391) 鏡研おのれか良へのし懸り
東魚 磨く鏡にうつる己の顔。その上へ覆ひかぶるやうに鏡を、押さへ磨く趣壺山 寫生の句で、自然の滑稽味があらうに詠まれて居る。

東魚「やつと、ひよ子離れのした位の若鶏を云ふのであらう。」

聖山「何故に齋日に鶏が誣るのか、其の理由が判明しない。」

省二「齋日の一箇の點景。極端に云へば、尾のない犬でも通じる。雛鶏もさうであるが、老鶏も亦然りと思ふ。」

東魚「實際鶏がかけるとではなく、丁稚などに譬へた丈けではないか。齋日に公休の丁稚が羽をのして遊び歩く、即ち翔けると云つたのであらう。」

省二「鶏もとあるので、駆けるのに鶏も交る氣がする。」

百兩は結ぶの神のうらを行

省二「持參嫁。裏、表の手段あるが世情。『不器量は暮までのばす大社。』結ぶの神様は心得玉ふ。」

東魚「結ぶの神から見れば、とんだ闇取引である。」

聖山「棄る神あれば、助ける神あり。」

省二「まだ呑むつもりだらう。——それとも探し物か。」

東魚「本性たがはずで、財布でも落しはせぬかと云ふ趣。」

聖山「幫間が客に貰つた祝儀包か。」

省二「牡丹の盛り。」

東魚「當時の芝居も廿日立位の興行であつたのであらうか。或は本當に膏ののつた處は、廿日間位との心持ちか。」

聖山「廿日の名を假りたのみで、牡丹には無關係であらう。或は市川家の替紋の、牡丹を利かせたもの歟。」

省二「顔見世の句かと思つたが。考へ

た末に牡丹にしてしまつたのであつた。」

お針か仕落掃ほとに言ふ

省二「針妙をお針といつて叱られる。」

東魚「お針は女郎屋の方の句に多く詠まれて居る。彼女達の口に掛つたら、針程の仕落ちを棒程にふれるは、あたり前の事だの活用で、別に内容はない。」

聖山「賛成。」

鹿の壁佛の道も細い道

東魚「佛の道と佛道のやうに云つてゐるが、實は山の寺への道なのであらう。」

聖山「道の字を無理に二つ詠み入れたが、決して佳句ではない。」

省二「細い」は鹿の聲にも掛つて居るかに思ふ。『聞きに行く道迄細し鹿の聲』(嵐翠)などの例もある。

坊主かへりの駄染成けり

省二「衣の下には白い着物許りきてゐたが、還俗(坊主還り)しては、さういふわけにもゆかぬ。それで紺染(駄染は紺許りでそめる)として用ふ。」

東魚「お説で成程と思ふ許りで、私に解は得られなかつた。」

聖山「僧侶が還俗したのは、白布を駄染にしたやうなものだと云ふので、實に白衣を紺染にしたのでは無からうと思ふ。」

十二月畫おそろしき油賣

東魚「おそろしき」とは、萬事忙しくもう日が暮れるかと思ふ心持ちであらうか。悠長な商賣は行く先き／＼で、追ひ立てられる心持ちであらうか。」

聖山「歳暮の油賣。何の奇も無いので

あるが、『十二月畫』としたのが、此句の山であらう。」

省二「十二月の世間は恐しい程忙しい。油賣はいつもの通り歩き廻りつゝ、その忙しう有様は目の當りする。——油賣と云ふと『糸遊を柄杓で汲むや油賣』(泉布)的な職業と、とられて居る。」

木からは紙子へ物をいふて行

省二「賀の祝の準備のために、部屋が煙むる。」

東魚「朝早くからの心持であらう。」

聖山「赤飯も焚き餅も掲ぎ、又酒の肴も煮る。」

小町か供のぬれて手を打

省二「傘持は神泉苑へかけつける『小町の雨乞』小町の留守に空をみて居る(武6)。」

東魚「機智的の句。」

聖山「雨を少しも云はずに一濡れて手を打」としたるは、面白い句と思ふ。」

省二「神泉苑は『都名所圖會』の挿繪に載る。二條御城南、東西二町南北四町に載る。善女龍王社のある池が有名で『守放は諸龍を呪つて瓶中に入、弘法大師は天竺無熱池の善女龍神を請し天下旱魃の愁ひを扶て観感を蒙り、小野小町も和歌を詠じて雨を降し』であるが興廢度々。現状を京都のお方に尋ねてみたところ、一町四方保存され、龍宮にとどくといふ碧潭在つて、鯉龜蛇棲息。五月一日神泉苑辨財天祭禮。大念佛狂言執行。古刹あれど小町雨乞に關する遺物は無いと

武玉川四編研究正誤表(二〇四號)

(頁) (段) (行) (誤) (正)

十一 二 一 寄拔 奇

十一 二 四 見れくは 見れは

十一 二 九 東魚ノ二字脱落

十一 四 二十 無心丈 文

十一 四 二十 無心丈 文

十一 四 二十 無心丈 文





柳川 世界史 (I)

戸 田 孤 蓬

原始社會

反撥と親和の矛盾を揚棄したところに人類の社會生活は發達して行く。維多の議論を尻眼に母系史の存在は認めざるを得ない。西人の歴史は女性崇拜であり、吾人は男尊女卑であつた。しかし日の本は女ならでは夜の明けぬ國と云ふ言葉は忘れてゐない。

母と子のつながりだけはたしかなり
洪水のあと又喰ふか喰はれるか
誰がためにつける飾りか金の羽根
生産擴充奴隷などとはあなどれず
母性史は女護が島にもちとふれる

萬物の靈長らしく殺し合ひ

(二) 古代國家群

エジプト

滔々たる大河の流れは人類に生活の向上をうながし、そこに最初の文化的遺産を發見さる。かくして紀元前三千年ナイルの畔にピラミッドが建ち、オペリスクには象形文字が彫りつけられてゐた。パピルスと云ふ植物から紙を製造利用する事も知つてゐた。

熱砂千里スフィンクスの瞋みおそれ
裸蟲の發願ピラミッドを攀じ
パピルスはにじみせず五千

スケッチがうまく象形文字うまし
ナイル河文化の種が流れつき
ミイラちとしぼんだまゝて怖い顔
再生をミイラとなつて信じきり

ヘブライ

アダム・イヴの話からノアの箱船を経て舊約全書の傳説を持ち、多神教徒にとりまかれながらエホバ只一神を信ずる民族がパレスチナを中心として國を作つてゐた。モーゼは不遇なる大衆とともにエジプトを逃れ、シナイ山頂で神の十戒をきき、ダビデはその武勇を四隣にとどろかせ、ソロモンは後宮三千その榮華をうたはれた。生え抜きの猶太人達。

奴隸開放エホバ最初にたのま

れる
十戒の一戒日曜休むこと
偶像へたちまち雷がなりはじ

フエニキア

ヘブライに隣して古代の海洋民族の國があつた。耕地の少ない我國の近江人が古來商才にたけてゐた如く、山近く海近きフエニキアの商人達は地中海はもとより遠くジブラルタルを越えて今のイギリスあたり迄その繩張をひろげてゐた。
水邊に住んで皮船丸木船



ス・フ入りの兒

小山 文三

つい五六年前までは木綿織物は非常に冷遇されてゐて且つ誠にお粗末に取扱はれてゐたものであつた。だから少し拙い月並の俳句なぞ御披露に及ぶとソリヤ、綿入りだよ……と冷笑された位で凡そ綿と言へば最下等なもの、お粗末千萬なものゝ代名詞になつてゐたものであつた。

時代はめまぐるしい程變轉して綿衣の輸入制限と配給統制に遇つてからは所謂貴婦人達さへ純綿の足袋を漁つたり、御出入りのデパートに純綿乃至は混綿の肌膚の優先獲得を運動したりして、純綿を着ける事は素よりたとへ半綿でも其種の服飾品を持つ事に一種の優越感を持つ様になつて來たのが妙である。

妻の家ではまだ純綿の御飯を頂いてゐる。などと話し合つて、奥様連を見受けるにつけて、これが純正内地白米の事だと判つて見れば、いよゝゝ純綿は高級品を意味する事になつてしまつた様である。斯くて今日此頃では少々下手な川柳を作つても



百姓の自ら作る處の米でさへ自由に自ら持ち出せない此時節
を彼氏が知らなかつた譯でもないが平常彼氏自ら持する處の化學方程式だけでは、何となく割り切れぬものを感じ初めたのも無理からぬ事であつた。

また風だ奴隷死ぬ程瀆がされ
る
本國と別にカルタゴ饒える日
親も船子も船孫も船て死に
帆を張れば海の極みも極める
氣
メソポタミヤの國々
メソポタミヤの國々
バビロニヤ、アツシリヤ、
ペルシヤ、

新會員を募る

松坂俱樂部

川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を
知りたい人▼趣味として川柳を
創作したい人▼從來作つてはあ
るが、よい指導者がないので一
向進歩しないと思はれる人々は
▼松坂屋(日本橋筋三)の七階に
ある松坂俱樂部の麻生路郎川柳

エジプトにピラミッドが出来
た頃、紅梅とアラビヤの砂漠の
向ふのチグリス、ユーフラテス
河の畔には一年十二ヶ月一週七
日の曆を持ち、楔形文字を書く
バビロニヤが國を作つてゐた。
それが紀元前一二五〇年頃當時
の世界征服に先鞭をつけたアツ
シリヤに受け継がれ、やがてペ

ルシヤ帝國の時代になる。帝王
ダリウスは郡縣制度を採用し印
度のガンジス河からバルカ
ン、エジプトに及ぶ大領土を統
御した。
獅子狩の日記楔形文字でつけ
人影の見えるとこまで國にす
る
ゾロアストルいつそ焔に飛び
込まん

二★月★句★會

★二月一日(土)午後五時半
★御津八幡宮(八幡町市バス停
西一二丁)
★兼題「慰問袋」「教師」
主催 川柳雜誌社

講座へ入會されたい。講座は月
二回、第一、第三日曜日午後一
時から開講。(作句・添削批評

講義等)會費一ヶ月金壹圓。入
會希望者は七階の俱樂部受付へ
申込まれたい。(川柳講座幹事)

戦線の將士へ
白衣の勇士へ

慰問品を



慰問品賣場一階



店貨百向用實
屋坂松
橋本日・阪大

○
斯くて同じ工場の醫局に勤務
するさる若い醫學士は彼氏の窮
状を見兼ねて、兼て醫局に用意
してあつた純綿の晒木綿一反を
着帯の彼氏夫人へ贈り届けて
「ス・フ入りの赤ン坊が生れて
も困るから此純綿を腹帯にお
使ひなさい」
と念の入つた挨拶狀が附け加へ
てあつたと言ふのである。

○
破れる——切れる——實用價
値——空つぽの兒
と次から次へ聯想して、自分の
作りつゝあるス・フ——近く生
れる赤ン坊……に想到する時、
まだく製作的自信のない空恐
ろしさを顧みて、苦笑を禁じ得
なかつたと言ふのである。

○
日毎夜毎にス・フの品位改善
向上に没頭し切つてゐた彼の工
學士は此心こめたる醫學士の贈
り物に感激したのは言ふまでも
ないが、科學者としての穿鑿慾
に張り切つてゐる彼氏は其の醫
學士の言ふところの「ス・フ入
りの兒」から
ス・フの實質——粗惡——未
完成——非難——脆弱性——

○
昔から醫者の不養生と云ふ言
葉がある。紺屋の白袴と云ふ言
葉もある。饅頭屋必ずしも甘黨
ではない。髪結ひさんと散髪屋
は案外髪を亂してゐるし、藥屋
さんは御災が好きだと言ふし、
西陣の女が銘仙を着て足利の婦
人が御召を好むし、縮緬屋が博
多の帯を締めてゐて蕤打ちが菰
に寝るのが通り相場ときまつて
ゐるとすれば、ス・フを作る技
師氏がス・フ入りを好まないの
も人情であらうか。

(昭和六年十一月十六日)



秋の空二重性格者を想ふ 愛媛縣 大洲町 上甲可洲

親真似て土工の子供よく遊び 同

切れかけた下駄で回覧板がくる 同

モンベ着て柄の型のとやかましい 同

御奉公を誓ふ別離へ日本晴れ 南支 米谷松太樓 同

戯れにまた出て来たかお月様 同

御用船あらしに負けて居ぬ姿 同

銃聲を聞かず禪よく乾き 同

貧耐へる妻となりたり隣組 東京 山田宙望 同

ラツセル車故郷は雪の底に有り 同

貧乏は寂しきものよ炬燵の火 同

分譲地大人が風を揚げて居る 同

刀鍛冶日本人の見せどころ 岐阜縣 郡加町 同

事勿れ主義の男へ義憤持ち 同

轉業へまだ此腕を頼られる 同

片腕を捧げ再起の傷痕章 同

タイブ打つ音も師走の風に似て 堺 麻生リリ 同

パン一つ買うにも財布のぞいて見 同

公園の空だけ異ふ色に見え 同

糸巻の大小中も趣味にする 同

朝の兒の寝顔へ國民服を着る 松江 松崎專太郎 同

縣報にたより静かな小商ひ 同

子は兵ときく集金は待たすまい 同

選舉間際シガだビールだソーダ水 ハワイ 長谷川猿吉 同

徴兵へ日系市民いさぎよし 同

娘の門出思ひ出ししばたゝく 同

區長から空地を借りた隣組 大阪 戸奈巳之介 同

會長もひよろ／＼炭をかつがされ 同

金落す餘裕を人に羨まれ 同

二千六百年おつむはげかかり 廣島 大山露斗 同

朝星夜星めぐまれてゐず 同

つみ木等あたへて見たい子がなくて 同

逢へば亦同じ部隊の子の話 名古屋 松井靜子 同

欠食兒小使ひさんに勞はられ 同

桃割へお巡りさんも振向かせ 同

流行語手紙に入れて嬉しい日 布施 小谷華素兒 同

發車ベル婦人は美しく慌て 同

酒がある話本當にしない顔 岐阜 市川童顔 同

混食の湯氣がもれて隣組 同

失戀をいきなり姉に見透かされ 同

子澤山飛行機が好き汽車が好き 廣島縣 竹原町 同

丹前の衿が冷めたい旅の雨 西野みづほ 同

⑨へ竹輪の穴が太くなり 同

初奉公卒業寫眞も持つて行き 愛媛縣 角野町 同

二千六百年今日一日の出勤簿 同

バットから光にかへて春近し 同

隣組嫁の話ももつて来る 同

中心の取れない母へ席が空き 大阪 竹部香林坊 同

從軍のタイブ機銃と思ひ打つ 同

干大根春へ連なる麗かさ 同

通用門からカーブ／＼の病院車 大阪 富本無煙 同

病院の水屋となじみのびる髭 同

⑩麻生先生の御見舞を頂く 同

お眼鏡の埃通してお大事に 同

娛樂から科學へと主婦の忙しさ 大阪 橋本美奈子 同

戦線へ感謝新たなお元日 同

りりちゃんへ 同

アツシスタント時々甘へてみたく 同

去る戀は追はず年頭所感あり 大阪 谷口寒草 同

旅便り土地の訛りも書き添へる 同

配給の炭へ現金丁度なし 同

婦人部の幹事候補が多過ぎて 豊中 三輪丘董 同

靴下に下駄つゝかけてお元日 同

回覧板子供の様な氣にもなり 同

廢品で出来た鼻緒を見せに来る 松江 梅本登美也 同

小僧迄生氣さうにゐる酒屋 同

戸端、蚊帳の周圍等至る所より

蛇が這ひ出しては惱まし、夜泣

うどんを喰べたいと云ふ妾に窓

を開ければうどん屋の聲が「夜

泣うどん」の賣聲が悶死した女

房の名の「おすわうどん」と聞

こえ、二杯注文して差し向ひで

喰べようとすれば鉢から蛇が飛

び出し逃げ出せば庭からも様の

下からも蛇がよこ／＼現れ、

日夜、蛇に惱まされ、妾が氣が

狂ひ、幸太郎が看病してゐると

或日例の蛇が天井からぶら下り

幸太郎の頭に落ち、驚くうちに

首に巻きつき、どうしても離れ

ず、もがけばもがく程首を締め

る有様で、今更おすわの怨靈を

恐れながら、もがき苦しむ折、

南無妙法蓮華經のお題目を稱へ

て通る坊さんに悟られ身延山

へ連れられて行き山ごもりをな

し瀧に打たれて荒行と云ふ場面

幾日かの後、満願の日に至り改

心の情が現れたか、お祈りする

坊主の水晶の珠数へ幸太郎の首

から蛇がはづれ観客をあつと云

はせた。

そして悔悟した幸太郎は「お

すわ」の靈を慰ぐさめ、前非を

悔ひる意味で先づお墓参りをし

て全國へ巡禮と云ふお芝居であ

った。

先づ實物の蛇を澤山使つたグ

ロ味たつぷりと身延山の荒行の

本水使用とがヤマであつた。



鉢巻をとつて材料難を詫び
煙草の火貸せばうなづく鼻の影 大阪 山本葉光
鼻ばかり隆く病後の立ち姿 同
武者ぶりついで妓いちづな事を云ふ 同
長所をも服務規律が殺すなり 野島神樂
菊花園戦車軍艦咲き亂れ 同
不平家の骸首夜業の氣が揃ひ 同
竹を割る氣持さつさと骸になり 松江 卷 壯典
島一つ舟一つ海も十二月 同
大小は無銘なれども士族にて 同
一台のミシンに遺兒と強く生き 新義州 高木満山
墳墓の地豈期せんやと拓土發つ 同
髻ばかり出たなと思ふ支那芝居 同
カーテンが何時も眞白く母と住む 北支 宇敷桃水
孫も出来信用も出来大金庫 同
カルガンの名に宣教師住んで居る 同
バリカンの順を待てる子澤山 大阪 山川富士
呱呱の聲又つはものが一人ふえ 同
⑤の品はケースに入れたまゝ 同
親の苦をどうとも出来ず遊びに出 神戸 卑上一扇
後任が来て前任のよさを知り 同
良い兄にならうとしてもよつてこず 同
片言へ親うれしくてうれしくて 朝鮮 弘津柳慶
仰山な縋帯一人息子なり 同
返り咲き時局大きく動いたり 同
自爆する覺悟で鎮山にかちり付き 朝鮮 村野東狂子
鎮山をやる手前御無理な寄附も出し 同
爆破した音程岩石は落ちてゐず 同
常會へ主婦も一役かつて立ち 下 國弘半休
まゝごとへ回覧板がとゞけられ 同
デパートの窓も國債買へと言ふ 大阪 吉川琴聲
運轉手なあと夫婦と思ひ込む 同

徐州にて

燃え盛る暖炉子の顔妻の顔 徐州 安井ひろし
日向ぼこほんとに支那の味ですよ 同
公益優先店の暖簾も御座います 愛媛 木村棟友
さす手ひく手動く所に物があり 同
出た出た出た代り榮えせぬ市議候補 堺 西村曲豆
新體制にあまりに遠い市議候補 同
隣組會社へ來れば社長なり 大阪 古川鶴聲
貯金から銀行員に見染められ 同
アドバルン一萬圓の夢を告げ 布 岩本晴美
漫畫から新體制を子に教へ 同
腕白もすれど兒の靴弱すぎる 徳島 矢田壽澄
三體千字文大分坐り馴れ 同
平凡に余生送れる皺があり 徳島 杉原愛鳩
親からの店子意地でも出ぬと言ひ 同
夜とぎと知らず口が効きすぎ 大阪 富岡巨人
辨當が中に有るらし折靴 同
⑥を付けて夜店の犬は賣れ 大阪 堀毛一龜
貧しさへ病も友も寄りつかず 同
友來りスケートリングの話する 愛島 清田田鶴子
フエミニスト女を有項天にしてしも 同
森本秋子様を見舞ふ
代筆をしてあげるのも久し振り 西宮 花柳蘭子
スリツバの音コーヒーが運ばれる 同
人絹を嗤つた人がみんな着る 大牟田 高田抱逸
今日死ぬか明日は死ぬかに御世話 同
宿直は安産のベル待つてをり 愛媛 堀川芳郎
⑦へ儲けの薄い世辭をする 同
大晦日車掌は同じ音で切り 尼崎 小林文月
お年玉申味うすゝ知つてゐる 同
神になる決意微笑の中にあり 高松 久保しん一
大廣間時計が止つてゐて寒い 同
寶塚泣くも笑ふも歌になり 長野 佐二木千隈

蛇の爪

姫田夕鐘

諸君蛇に爪があるのを御存じ
でしょうか。一昨年天王寺の動
物園で園長が白衣の勇士に錦蛇
(二間半位)を見せておられた。
爪は中腹より尾の方へ下つた所
に二つあるのです。説明に此の
蛇だけしかありません。此れと
てもやがては落ちてしまふので
す。觸れてごらんと言はれたの
で、僕もこわごわ觸れて見た。
蛇の係の人が頭を持つてゐてく
れたのは言ふ迄もない。

蛇が幸太郎の首から取れる時
観客一同は身延山を灼がり舞台
で南無妙法蓮華經を稱へる俳優
の坊さんへお賽銭を投げるシー
ンに實に物凄い馬鹿々々敷い壯
觀であつた。思ひ出せばあの時
の團扇太鼓の賑かさ、お題目の
眞面目さは今時の青年諸君が觀
たらどう感じたであらうか。安
珍清姫日高川の蛇、刈萱童心の
蛇の傳説もあるが事實物語りと
して「執念の蛇」程大袈裟な新派
芝居は現代ではもう觀られまい
お芝居の好きなかほるさんな
どには、昔そんな芝居があつた
なあと偲ばれるであらう。其れ
にしても「蛇姫様」の映畫に蛇
が一寸より出なかつたと云ふ映
畫ファンの言葉を聞き私の青年
時代の蛇に關する駄文を呈しま
した。

★★★

★★★

カフエーも西洋茶屋と邦譯し
一錢の愛國心へ氣が揃ひ
四十九錢公定値段の面白さ
妓等に職域奉公説く署長
百ヶ日経たぬに後妻どうですか
同 飯尾寄與史
同 鈴木石鹿

京城徳修宮見學(二)

王宮の見物五錢で日が暮れる
鐵原秋をしづかにしめて錆び
上役にばつたり會つた懷手
お手並の程は知れてる將棋盤
鮮人に間違はれとむない御紋服
通譯を連れて坑夫のうつたへる
校長と面長に臭く行きちがひ
後二年壯丁へまで浪人し
見せたさに結ふ桃割も春のもの
鶏を飼ふには庭が狭過る
公休日子供の頭刈つただけ
凄き牡丹雪なり恵方道
その上に純綿またもつぎをあて
餅を搗く音が間借の身にひびき
同 松田幸士
同 野口柳太
同 高原惠源太
同 小林ヒデヲ
同 奥田綠翠
同 藤森小雅子
同 檜部八櫻
同 中西彌生
同 清水義介
同 八幡勿來

歩行ぬ舟 默然人

(217) 武玉川四編研究(九)の中
歩行ぬ舟を三味線で引

御三者の解釋に對し、私見と
大差があるのを述べませう。
私は江戸關係本を讀むであな
いから例證等は擧げられませ
んが、幼時によく見た屋臺の
折引出しに「底抜け屋臺」
に、しばしば「舟の型」したも
のを見受けたものです。夏祭
に多いのかと推察される。紅
提灯などの釣し、納涼舟に模し
たやうに記憶してゐます。一底
抜け屋臺ですすから、小型の

満員の電車へ軍歌流れて來
歌謡曲かけ支那の明日想ふ
箸紙にお松とあるは女中なり
尙美堂の娘も指輪はめてゐ
塗りかへた道具計りの純喫茶
見舞客の手で粉薬をのまされ
姉の戀女中にそつとのぞかれ
振袖はたまに男の肩も打ち
母と來て二見ヶ浦の雨に居る
用のない様に梯子は吊つたま
餅つきにはくモンペの意氣を
お婆さんそんな眼せすも譲り
三十男だが母親は遠慮せず
七十を過ぎても眞の無我は稀
足元へ銅貨落した満員車
雪の原歩哨の胸に故郷の山
現今の新京サラリーマン
の通動振り
新體下一キロ四を徒歩で行
【塵山云】歩かぬ舟は底抜け
合なりと云ふ説は採用して
に附屬する三絃、歌うたひ
笛鼓等のほふる物なるが大
さは疊一帳よりは稍大きく
て長方形の枠なるが舟形の
ものも稀には有りたるなら
ん歟老生は舟形のものを一
回も見た事無し默然人君
はしばしば見受けたと述べ
られたれどこれは稀なるべ
し。
優れたる政治と經濟
（和田斐太氏著）
哲人として知られてゐる和田
矢杉三羽
大阪南
要兒
大阪有馬千斗
江口正路
村上角堂
東京森本秋子
兵庫藤河合明子
大阪金政細泉
西宮三宅花美
大牟田上村十四之
大阪大本紫月
大阪星伽龍路
大阪赤塚美竹
東京淺田右聞
大阪濱本みのる
大阪山本大洋



隣組

(五ノ其)

吉田水車

流行兒と言ふたらそら邊か
ら叱られるかも知れないが、新
體制を押し上げて居るのが隣組
である。こゝをつゝけと卵の殻
を内から教へて居るのが隣組で
ある。隣組の初會をやりますと
言ふ、回覽板を見てから三日し
て満洲へ來なければならなくな
つた私はなつかしい名古屋辯や
何やで無かし盛大な常會が生れ
た事だらうとはるかに満洲奉天
から東の空を望んで居る。こゝ
から祖國をふりかへて見ると
流石の酷暑奉天にも必ず陽の當
る時があつてほのかながらもあ
たゝかな味を感じる。そして水
分と言ふ水分がコチ／＼に凍つ
てしまつてもそれをたとへ一と
ときでもやわらかくほぐさず
に置かぬ太陽の熱、この熱こそ
祖國日本の姿であるのをしみ
／＼とおもふた。そして大い
な隣組に全幅の感謝をさへけて
實めを果たさずに来た私を許さ
れんことを祈る。
（昭和十五、十六、十五來稿一週目）



評月 川柳一ト筋

路郎・艸樂・白柳子
鋭々・紫香・亞鈍

路郎「それでは始めませうか。
白柳子「始めるまへに、どうい
ふ風な形式で……
路郎「ソウですな。『近作柳傳』
の中から自分で面白いと思つた
句を抜いて、それに對して批評
したらどうですか」。

鋭々さん！一つ。

鋭々「『近作柳傳』では女流の句
が澤山あるやうに思ふんですが
割合に皆、相當女性らしい觀察
を捉へてゐます。そこで……

鋭々提出「近作柳傳

情熱は静か洋菓子つゝい

て居

女流の句でも本田ユリエ氏の
五、六句が目付いたのですが
その中で右の「情熱は」の句は
なにか平凡なやうですが、知性
のやうなものがよく出てゐるや
うです。一寸取濟ましたインテ

リ的な女性の姿が浮かんでくる
やうに思ふんです。とりたてゝ
特に穿つてゐるとは言へないで
すけれど、落着いた趣味が何と
なく漂うてゐて良いのぢやな
いかと思ふんです。以下——
汁粉屋を割勘て出たタイ
ヒスト
などの三、四句も皆、同程度の
ものですが、同じやうな作者の
氣持を汲むことが出来ると思ひ
ますネ。
紫香「私も一番最初に、やはり
本田ユリエさんの句が目付い
たんですが、私は「汁粉屋を」
の句が女の持つ緻やかさが出て
ゐて非常に面白かつたと思ひま
す。そうたいに此人の句は女事
務を對象にした句が多い。或ひ
は本田さん自身も女事務員か、
何かでないかと思つてゐます。

白柳子「私は「情熱は」に非常
に心を惹かれてゐたのですが、
私の感じてゐたのはマアそれ丈
ですナ。

路郎「『川柳雜誌』で閑秀作家の
消長は幾度びか、繰返されてゐ
るが最近、又勃興の機運が生じ
てゐる。ユリエさんの句の中で
は矢張り「情熱は静か」が一
番優れてゐるやうに思ふ。句に
對する感想は鋭々氏が言ひ盡さ
れてゐるので特に述べない。次
も女流作家の句だが、生子さん
の——

路郎提出「近作柳傳

この手紙行く地もこんな

夕焼か

生子洋子

これも別段に變つた見方の句で
はないけれど、女らしい感傷的
な氣持がよく出てゐると思ふ。
何だか夕焼に對して夢みてゐる
やうな姿が彷彿とする。
白柳子「私は一寸この人の句
で——

子の去んだ廣場は繩の落

ちた儘

に非常に惹かれてたんですけれ
ど——つゞけませうか——え！
この句、非常に綺麗な句に思つ
てるんです。繩飛びか何かして
遊んでゐた情景が非常に良く現
れてゐるんだと思ひますが。

鋭々「繩といふのが何だかこゝ
目觸りのやうな、所謂子供とい
ふのが今まで遊んでおつた優し

みの中に、何だか荷造りでもし
た跡の繩を聯想する爲か、目觸
りしますが、何か繩の代りにほ
かのものであればよかつたと思
ひます。これに對して前の「こ
の手紙」は非常に好ましい氣
持が夕焼といふ對象物をもつて
來たために非常に生々しくとし
たものを感じられるんぢやない
かと思ふと、やはり「この手紙
——」の方を自分は採ります。

紫香「兩方共非常に感傷的な句
で、「子の去んだ」の方は何か
そこに、この場合の繩の意味は
子供のやりつばなしが出てゐる
やうで、そこに落ちてゐた荷
造りなんかの繩の端切れで繩飛
びをして、夕方になつてそれを
抛りつばなしで歸つてしまつ
た。さういふ子供心に——跡の
ことを何も考へないと言ふ所が
面白いんぢやないかと思ひます
「この手紙——」の方は非常に美し
く、優れてゐる句として私は拜
見しました。

路郎「子の去んだ」の句は一
定の時間を表現してゐないにも
かかはらず、これで夕闇の情景
があり／＼と感じられるところ
が、この句の手腕だと思ふ。こ
の句だけでみると繩といふもの
が、突然的なやうに感じられる
が、子供が遊んだ廣つばの跡に
繩切れが蛇のやうに、のたうつ
て取殘されてゐる事が事實ある

と思ふ。

白柳子提出「近作柳傳

二雲が雲空の財布が二つ

ある

岡真理子

白柳子「これ、どうも女の名前
が出てゐますが、閑秀作家とし
ては線が太いと思ひますが、ど
うも……。紫香さん！ どうで
す？

紫香「ぼく、これ、苦手だんね
（笑）——數學的な面白さを狙
つたんでせうけれど、どうもこ
んな句、苦手だんね。
路郎「まあ、無理に批評せん
らん事、ないネ。

鋭々「これは矢張り、理窟めい
たところの作句上の面白さ丈で
あつて、人間を感じる事が渺い
のが缺點ぢやないかと思ふ。そ
の爲か、その時なり、場所とい
ふものが勿論この文字の中には
現れて來ない憾みがあるので、
自分としては判然とした感覺を
求め難く考へます。

路郎「この句から情味とか言つ
たものは求められないが、穿ち
といつた方からすれば一つの把
み方をしてゐる。若い人達は、
財布がある上に又財布を求め
る。自分の所持金に比較して、
かなり高價な財布をもとめる性
格が一部の若い人にある。そし
てその孰れもが空財布で、ポケ
ットから出てきたり、机の抽出
に投げ込まれてあつたりするも

のだ。まあ、この句はさういつた點を見付けた句だネ。持主の金使ひの程を窺ふ事もできる。鋭々勿論、観念的な興味と、理知の煌めきは認められるので、たゞ、前に言つた事は情味がないといふ丈の事を述べたまでにすぎません。

紫香提出 近作柳樽

歩き

谷口寒草

紫香 今度は男の人で谷口さんの、この句ですが、一種の僻みと言ひますか、自分の変れた姿を成る可く人に見せまいとする氣持と、キツチリしたと言ひますか、その性格が出てゐて面白

いと思ひました。私の友人にも、やはり斯ういふ感じの病人がありまして、見舞ひに行つた時に近所の驛まで見送つてくれる時には必ず、羽織を着て送つてくれます。それで一しほ感じました。

白柳子 一寸だけで……

路郎 どうぞ、やつて下さい。

白柳子 ああ、私の弟が昨年、田邊の方へ出養生してゐましたが、丁度斯ういつた病人でなかつたかと私は思つてゐるんです

一人で養生してゐる爲に、貰つた手紙の返事には必ず自分から投函しにいつたといふ事を聞いてゐますので、此句にも私は惹かれました。

鋭々 これは病人でも病後の病人で、ポストまで歩いてゆくといふその事が、嬉しい感じが出てくる事を感じる句でせう。無理を押してまで行くのではなく、軽い喜悅感が現れて居つて、感じの良い句だと思ふ。

路郎 病後であるといふ事もよく判るし、それから親しい友人に近狀を知らせるのにポストまで、もう自分で歩いてゆけるやうになつたといふ喜びも出てゐるし、身邊近時といつた句としては成功してゐると思ふ。

×× 一つ問題になる句を出したら、どうですか。

鋭々 さういふでは一つこれ、別段に良い句とか、何とかいふんでなしに……

鋭々 提出 近作柳樽

二階から隣家の秘密見て

了ひ

松井靜子

この、「見て了ひ」といふ言葉は川柳の常套的な手法として使はれて居りますが、この句の價値は却つて、見て了ひ——といふうち切つたところに、少々缺點があるやうに思はれる。加藤柳郎といふ人の俳句に、

高層より人の全裸を見じとす

といふ、同行異曲の句を見たことがありますが、此場合、この俳句で現はれてゐる感じの方が高いように思へるので、結局

この靜子氏の句には、ただ見たといふ丈の感想が表現されたままで、自分の主観的描寫が伴はないのだと考へられる。これに就て川柳の立場から各位の御意見を言つて貰へば結構だと思ひます。(此の時、柳樽出席)

路郎 この句の弱點を言へば、「隣りの秘密」といふ事實を具體的に現はしてゐないで、それを見て、どういふ氣持がしたのか、判つきりしない憾みがある。

鋭々 隣家の秘密といふ漠然とした言葉でも、その際に自分が感じた事柄を表せば、一つの生きた句が出来るのではないかと思ふ。

路郎 それは、できるね。

白柳子 私はこれを、物干かと思つたのですけれど、物干からでなければ、隣が見えないのと違ひますか。

鋭々 それは——

柳樂 それは隣りから下階でも見えるし、物干とは限らんね。

路郎 T字型の家だつたら、充分見えるよ。

鋭々 短詩を作らうと、捉へても、描寫の方法によつてはたゞその儘のものに見られる處れがありますね。

路郎 ああ、それはありますね

白柳子 提出 近作柳樽

二羽居れば夫婦と見なす

氣の若さ 長谷川猿吉

柳樂 これは、「二羽居れば」は鴛鴦とか、家鴨ぢやないですか。

鋭々 鴛でもない。

柳樂 一寸目には何か雌雄の判らん鳥ですナ。此「氣の若さ」を分析すれば必ずしも若い人ではないですナ。自分の事を言つてゐるでせうか。自分がまだ氣が若いと言つてゐるんだらうか。相當の年輩であつても、まだ氣が若いといふ述懐なのか……

白柳子 これは、「氣の若さ」といふ風に書いてますが、若い人が自分のことを、氣の若さと表現してゐるのと違ひますか。

路郎 若い人が、「氣の若さ」と表現してゐるんぢやないね。

柳樂 そうですナ。

路郎 それは、やはり相當年輩の人で鳥を見た時の述懐とでもいふべきでせう。

柳樂 面白い句では、ありますナ。

鋭々 自分一人の場合か、友人と對座して目撃した場合もあるんぢやないかと思ふんですが。

矢張り、青年自身が見たのではなく、さういふ話を相當年輩の人が、自分を憶ひ、さういふ話をした時の事でないかと思ひますナ。

柳樂 それは句から言へば、その方が勝つてゐますナ。この、

氣の若さ——は主観やけれど、觀方は結局客觀的ですね。

鋭々 人の態度が客觀的ですね。

路郎 理窟から言へば、二羽居つたところで必ずしも夫婦でないが、頭から夫婦と見なすところに、どこか氣の若さがあるといふ感じですね。

白柳子 布哇には(俳句者の住所)どんな鳥がゐます?

路郎 そう變つた鳥は居ないでせう。同じやうなものでせう。

しかし、同じ鳥なら鳥と言つても滿洲の鳥は色が白いやうに、布哇あたりでは名前は一緒でも幾分か違つてゐるでせうね。

柳樂 確かに川柳家らしい感覺ですね。この氣の若さ——と言つたところは——。

路郎 提出 近作柳樽

オルガンの様に齒齧者は

おさえて見

芝田靈子

路郎 比喩が非常に面白いと思ひますナ。

柳樂 さうですナ。面白いですナ。

紫香 面白い感じ方ですナ。

路郎 齒齧者へ行つて、あの椅子の上へ押し上げられると、かなり神經を悩ますものであるが、この句を讀んでみると、その椅子の上に座つた人の句ではなくて、第三者の客觀的な見方による句だといふ事が感じられ

る。句を一讀しても、齒痛といふものは出てこないで、非常に朗かで、そして意外な見方をしてみるところにこの句の興味がある。

散髪屋師走の頭ねじむけ

といふ句がありましたね(笑)

當事者、つまり散髪をしてもらふ人、齒醫者の椅子に懸けた人その人の受ける手術とか、散髪といったやうな場合、齒醫者や散髪屋さんは、いつころ患者やお客の氣分を構はずに、手馴れた手つきで遣つてのける、と、まあそこに何ですナ。川柳家の感情が斯ういふ風に動いてゐるわけだと思ひます。

路郎師走の頭——といふのは確かに川柳語だね。

白柳子私はまだ齒醫者に行つた事ありませんが、オルガンのやうに——が良ろしいね。

紫香さうですネ。このオルガンが、よう効いてますね。

白柳子川柳語のことで、一つ何か良い句を捜しませうか。

鏡々提出近作柳樽

どの音で切れたか車掌有難う 酒井美知夫
路郎川柳語のことが出たが、どの嘘がほんの夫婦にならうやら

といふ古句がたしかにあるやうに思ひますが、どの音も、どの嘘も確かに川柳語だと思ふ。車掌有難う——は美知夫君の進境だと思ひますね。うまくなつたネエ、この人は。實際！

鏡々混雜した車内描寫と鋭敏な觀察で、優れた句ですナ、これは。

白柳子この下の方の車掌有難う——で切れたやうで切れてないところが非常に良いと思つたのですが——。

路郎どの音で切れたの——であの絶えず、ばちばちと無駄にモーションをつけてゐる有様が彷彿として大變面白と思ふ。切符を突き出してゐる人物も躍如としてゐますナ。これ丈の事は實際川柳でないと言へないことですね。

紫香誰も氣の付いてないところを言ひ表はすのは川柳でないと云へない。しかし大分に馴れた車掌さんですネ。

白柳子有難う——で時代を現してゐる。

路郎實際、俳句や短歌では、これは出せないネ。

白柳子川柳の醍醐味やね。これや短歌なんかでは言へない。これで判るんだからネ。
路郎歸還勇士の句を賞めたところで、今日の月評を終りませう。ありがたう。(亞純筆記)

與太話

小畑自由朗

(一)
「お父ちゃん、よその人の病氣はつかし瘧して、なんでもうちのお父ちゃん、の神経痛だけほつとくの」

(二)
「あゝ服か、それはお父ちゃん兵隊から戻る時に、そのなんちゃ、えーと、あとから這入つて来るお父ちゃんに、剣も鉄鉋もやつて来た」

(三)
「うつしらん」
「うそ」
「うそ？」
「うそ」
「あほう、お父ちゃんは何でうそなんぞ云うもんかい」
「でもお父ちゃん、の赤ちゃんの時、の寫眞があるやないか」

(四)
「お父ちゃん」
「なんぢやい」
「兵隊へ行つとつた時の服見せて」

(五)
「お父ちゃん」
「なんぢやい」
「兵隊へ行つとつた時の服見せて」

(六)
「お父ちゃん」
「なんぢやい」
「兵隊へ行つとつた時の服見せて」



淑髮ウエーヴ

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

山口倫子
經營
電南992



(著筆るけ旅に)

旅 家 で 旅 二 省 子 蛭

床 蟲

旅は憂いもの辛いものと云はれて居るが、私の年齢になると世間苦をいくらか體驗しすぎて居るので、旅だからとて事新しく憂愁をかもすが如きはなく、又大抵は覺悟をして出掛けて居り、憂い事が話材となり辛い事が句材となり、悉くが慰樂となつて所謂旅気分感興に満足させられる。どうしても川柳上手になるには、百聞百見をひろめ得るゝ多くの旅行をせねばならぬと思ふ。旅行文學としての川柳詩は、江戸禮讃の昔は問はず今日に於てさへ提供せられざるのみか、寧ろ存在しないかの實情なのは大缺陷である。私は病弱の身なるが故に温泉地に行くことはある。一所に長逗留し醫者にかゝりつゝ湯治をするのだ

から、「旅」としては非常に限られた意味に終る。行脚性の旅行は十年に一度位よりなし得られないのを残念に思ふ。爲に各地の風習や状況に關しては知らぬ事許りで、専ら書物にたよるより外はない。「健康」を羨望むの切なるものがある。

先般の旅行中、たつて「辛らかつた事」をあげよと言はるゝならば、旅館にて床蟲の襲撃をうけたことである。床蟲は床虱、寢蠹虫、臭虫といひ有名な南京蟲であるが、南京の中華民國政府を承認し、興亞共済共榮の大業を完成せんとする途上にては暫らく「南京虫」なる名稱を用ひたくない。然しその起原や如何にと手取早く「明治事物起原」をみるに、『明治十三年十月、(東繪)にいふ。大阪鎮臺第八聯

隊の營中に生じたる毒虫は、かのガニの種類にて兵士の寢臺より湧出し爲に何れも身體中を刺れ、非常の苦痛を爲してより種々驅除法に手を盡されても尙ほ去らぬ故に、同隊は中寺町へ移され、右の寢臺を燒棄て云々とあり、南京虫の名稱はなけれ共今日の所謂南京虫なり」とある文けで物足らぬ。「雜誌支那」には彼の地に於ける俗説二種が記され、長髮賊が南京に都を建てた頃から、この虫が南京で盛に繁殖したといふ。してみれば南京虫の名は日本製であつても適切となる。「五行志」には「南越の盛暑、男女川澤を同じうす。淫風の生ずる所、虫臭惡爲り、是時、嚴公齋の淫女を娶りて夫人と爲す。既に入りて兩叔に淫す故に蠶生ず」とあるさうで、東京人がエロ蟲と呼んで居るのも亦適切となる。——(私の友達は家ダニをエロダニと云つて居る。これも十分當つて居る)——

旅では、兎角慾張つて一ト時を惜しみ、人と會合し肴を見物する。過勞は日々加はり且寢所移れば眠りにつかれぬがちの老人性から、遂に神經衰弱となる。吸血虫の刺傷の痒痛に一睡もなし得ざる夜が続いては體が保てない。立派に二箇の刺跡(此の虫の特性である)があり、辛う

じて三匹を捕へした。丁度その頃水府さんが用件で東上され宿が定まつてゐないとのお話に同宿をお勧めした。同じ部屋に枕を列べようと云はれたが、モウ別室に褥がのべてあつたので、その方をと申上げた私の胸中では、私の部屋の床虫に、私より年の若いこの川柳の大家匠を喰はせたくはないからで、後日初經驗である刺傷痕の記念寫眞をお届したりした。又水府さんが「あんたが酒を呑まれるとは知らなかつた」と不思議がられたのも、私に於ては床虫に對抗する睡眠劑の代用品として服用しなくては、その後の旅行が續けられないからである。

し來つて殺虫劑を撒布し行くといふ。然し世界的に分布して居る此の可憐な虫の全滅は容易ではないであらう。我國の一流ホテルにもスプレーガンの備へつけがあるので判る。

宮尾しげを畫伯編「川柳百人一句」第三篇に描かれて居る私の手の甲は、痒痛に惱みつゝある日のスケッチなのである。

非特異性全免疫元

オムニコン

— 聖藥 試文 —

本劑は非特異性免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪の主體とせるものなり。

(適應症候群)

淋病、各種肺炎、肺(癰)腫、梅毒、中耳炎、重傷、其他各科、急性、慢性、後遺症、傳染性、敗血症、並に化膿性諸疾患、對し廣汎に著効を奏す。

(用法)

注射器、調作用器、用法簡單、發効迅速、價廉至。

(包裝)

① 30人量入 100人量入
② 30人量入 100人量入
③ 30人量入 100人量入

總發賣 株式會社 黒田藥品商會
大坂・東京

滿洲雜記(一)

湯淺小城子

滿洲や支那では、一人で幾人もの太太―妻の事―を持つて居る者が非常に多い。一面から觀れば、太々の多い程其人は社會的に知名の士とも考へられるのである。

そんな譯で、法律に基いて業務を執行して居る或る特殊會社の旅費規定に、赴任移轉等の場合本人相當の車馬賃宿泊料が妻に對しても支給されるのは當然として、さて問題は最後の項に、

「但し配遇者ハ一入ニ限ル」と規定されて居る事である。もとより日本内地に於ては、一笑に付されるやうな事柄ではあるが、此處滿洲ではぜひ之が必要なのだから面白い。

移轉料妻は一人に限られる

久しぶり出張する事になつた。行先は日部落である。滿里四十里と云ふから日本里にして縣城から七里弱に當る。バスも途中迄しか通つて居ない交通不便の處だから、同行三人始から馬に乗つて行く事にした。勿論旅費は相當殘る勘定になるので勇躍馬を走らした譯だが、滞在三日いやと云ふ程風や蚤になやまされてしまつた。やつと用務をすまして縣城に歸りついてからも、衣類全部着替へて、獨り者のつらさ着て行つた物を凡て洗濯屋に出す仕末、之にあ折角旅費を貰つても大部分洗濯代になるかも知れないし、第一精神的に肉体的に參つてしまつて、



卸貝

★
人某田岡

冷凍魚。――腐らない。その代り泳がない。

※
一天にわかには振き曇り、――これは美だ。雨が降ると、それはもうそれでおしまひ。

※
一世の師表と仰がれるか、言語道斷となるか。宙ぶらりんは嫌だ。

※
一世の師表。これは努力次第でなれるが、言語道斷にはなかなかなれるものではない。その證據に、歴史を見給へ。前者はざらにあるが、後者は一人もない。

※
かき餅。世帯でもないし、戀愛でもない。



同舟近詠

松山 前田 五 健

はき初めのモンベ休閑地の野菜
永住ときめさす隣組の情
隣組見習ふ事や直す事
旅役者梅幸はんも知つてます
科學とは遠く達磨の臍を見る
初居合帯の固さへ大朱鞘
傷痕章子供目ざとく頭下げ

※
詩人が二人話し合つてゐる。彼等はお互ひに點頭き合つたり否定してみたりはしてゐるのだが、語つてゐることは、それぞれ勝手なひとりごとだ。つんぽ同志の會話。――だが然しそれはそれでいゝのである。彼等がお互ひに相手を了解し合ひはじめたら、その時既に彼等は詩人でなくなつてゐる。――詩とは君そんなものではないのだからうか。

※
仕事を待つてゐるといふことはいゝ。すくなくとも休憩のよろこびを知ることが出来るだけだ。

※
何處まで行つても大阪であり、何時間歩いてても神戸だつたりしたら、人びとはきつと都會を呪ふにきまつてゐる。ともしつきの電燈だつてそうだ。

※
賛成したり同感したりするためになら、勉強など止めにした方がいゝ。何等の否定をも含まない、又は表はせない勉強なんて葉っぱのない大根みたいなものさ。

※
窓。そこから出るためのもの

金澤 安川 久留美
繩帶を締めて夜明の能登へ指
うら／＼と根上り松の下に家
漁りは半島からの風もうけ
曳き上げた舟の下から春の草
蛇の皿踏いで髭の武勇傳

兵庫縣御影町 長崎 柳 秀
視箱夫婦それ／＼馴れた筆
貧乏は覺悟でしさと襷がけ
小休止脚撫でゝやり撫でゝくれ
寶來の旭まばゆく濱につき
咲えられるだけのことあり犬嫌ひ
今 治 長野 文庫
萬引の去つた後から感心し

今度の出張は餘り有難くなかつた。そこで

出張は旅費と虱を相殺し
斯んな句が出来た。

土地の古老の話によると「昔は頭の髪を見ただけで、此女は太々だ此女は娘だと、區別がついたものだが、此頃は、皆同じ様になつてしまつてどちらがどちらとも見判けかねる」云々だ。そこで、我々日系は若い女を見ると皆「姑嬢？」と思ひ込でしまふ。太々といつても日本と違つて二十才前のが随分多いんだから問題が生じる譯だ。斯んな例がある。

「おい王君アノ姑嬢好看麼」。「フフ……」「え、どうしなんだい、おかしい笑ひ方して……」「でも丁さんおかしーいよ、あれ私おくさんです」「??」一事が萬事此調子、他は推して可知。
太々も姑嬢にする日本人

○ 満人は子供でも女でもよく煙草を吸ふものだが、斯んな事があつた。

吉林省用通縣城から、滿鐵公主嶺の町迄バスにゆられて二時間の行程、丁度半分位を走つて居た頃、私の前に座つて居た一見十三、四才位の小孩が、ポケットからおもむろにスピニアを一本取出し、一人前に口にくわへてさて云ふ事がすさまじい、

偶洋火有る麼？（貴方マツチ持つてゐませんか）
小孩の洋火、沒有にちとあきれ

かつぎ屋の出發又も二日伸び
尾に鰭をつけて講談まだ續き
おまへんと聲の尖つた小あきんど
待たせといて醫者落ちついた晝御飯
ありがたや雜煮の數の割當ても
新体制にあがきながら金が出来

M君の入營

二十一日朗かに立ち朗かに別れ
あさましや人の紙幣束數へてた
欠伸して氣づく貧乏に底がない

松江 勝谷山川 兒

十二月火事は一寸でをさまつた
鉛筆を舐めてる母の歳を知り
十圓の夢百萬圓の夢

軍服を着ると炭屋に見えません
消え相で消えぬ葬儀のお燈明
本當の友達がなない女事務

假縫ひを女事務にも覗かれる
口止めか特別賞與の中にある
酒が手に入らぬ話のお元日

淺野縣大洲町 今川 棕 影

ぼろいとは昔の言葉にありました
面會の上でと金のことらしい
只一つ安いものあり預金利子

幕あける氣持ち元旦のカレンダー
人的資源ヘルンベンは減らず

汪 精 衛
德孤ならず汪精衛のゆくところ

且談じ且飲む酒のない時節
除夜の鐘まだ自轉車の用があり
嵩みゆく負債のいつか庭も枯れ

一死奉國を戦線から寄來し
子煩惱怒り放しの氣がとがめ
平凡を取得にされて使はれる

柏手が誰かと揃ふ初詣で
初仕事使ひ果した顔が寄り
轉業へまた轉業が迫つて來

容器込みの値段段容器を持つてゆく
酒斷つて我が量父に差し上げる
轉業がこわく有限會社出來

恩給は手つけず花を教へます
節米の話奥さま猫を撫で
消炭の情熱もまた侮れず

吊皮で君は岩波文庫よむ
轉業に手足纏いな母を連れ
誘惑に負けて悔いなきもてつぷり

名古屋 鈴木 可 香
山口縣 三 原 狂 路

濕布にエキホス

包裝
一〇〇瓦
二五〇瓦
五〇〇瓦

感冒、肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、齒痛、
乳房炎、月經痛、腰痛、火傷等……は

エキホスの好適症にして迅速に確實に安全に奏効し使用法も至極簡便なり



C-27



狸

前田 五健

さて話は松山市中へ戻つて、松山警察署の横向ひに法相宗の六角堂がある。こゝに樹齡數百年の大榎があり、これが又「六角堂さん」として名高い。現存〇〇〇議所の〇〇〇さんが見事にやられた話、〇官廳の〇課長が茶會の席へ招かぬ客が来て、歸り掛の怪異等みな六角堂さんに成つて居る。私の畫の大先輩で元郡長、判事、警部を勤めて本年九十歳の手島石泉翁の話なども八百八狸の本場らしくて面白いから一寸御紹介をする。

石泉畫伯が警部時代と云ふから何十年前である……或夜南堀端町に多數の提灯が並び、南へ進むので、ハテ、此の夜更に誰れの葬式であらう。あれ程の供人なら知名の人に相違ないが、と思ひつゝ足を速めて、近づくと灯は出淵町の妙清寺へ吸ひ込まれる様にはいつて終つた。ヤツト寺に来て見ると門は固く鎖されて、人氣一つない「ハハーこれが狸火か」

まあ一つは、同畫伯の少年の頃、毎夜火の番が金棒を引摺つて通つた後へまた、金棒を引摺つて通るものがある。武術の心得ある畫伯の父は或夜、表戸を細目に開き、到來を待つた。案の上、來た

「チャリン／＼／＼」本當の火の番は遠くで音を立てゝ居るのに、新らしい金棒の音は待ち構へる表へ來た。「ヤツ……」

電光石火、手に残つたのは、雪駄の裏金を藥で綴つたものであった。

それから此の附近の履物紛失が頻々として起り町内會議の末、あの狸に相違ないと一決、御機嫌とりに四ツ角へ赤飯と油揚げを供へたところ、二三日は何んの異變もない、その内に赤飯も油揚げも食はれて居る。一度、二度

五度狸も機嫌が直つたらしい。さて或夜、縁側へ竹皮包みの饅頭が……それも包みに似ず如何にも残り物らしく三つ程チョコナンと置いてあつた狸の禮である。

當年九十歳の石泉畫伯は白髯をシゴいて、呵々大笑、

「イヤ昔はいろ／＼面白い事がありましてのそれが又、善導善用されるから、人間は理窟もなく正直でしたワイ」

「先生、繪の方で狸の繪をよく描かれるのは誰方ですやう」

「さあ淺學寡聞で残念だが、應舉、蕪村は謹かに名筆であつた。それから近代では君鳳金鳳のを觀たが、よく描いてある。然し狸は緻密に描くよりその飄遣性から考へて粗畫の方が面白い。

つまり多く語らず、繁く畫かざるも一點一描自然の妙機を發揮すると云ふ方です。料理屋の門口の狸、床の間に置物の狸でも實物に近いのより粗大な放漫的な所に面白味がある。それは川柳の行き方も同様じゃないですか」

石泉老畫伯の話は、なか／＼つきない。

「そら／＼今某省の大官である某氏は松山中學生時代、自宅へ遅く歸る時があると、あの森松長橋の堤、松原あたりに必ず迎へ提灯が出て居たと云ふ事で

す。宅は有名な金平狸の棲む荏原の八幡社ですからのう」

「迎へ提灯と云ふのは……」

「狸の提灯だよ、その灯の行く方へついて行けば宅へ歸れる。田甫路でも危げなく歸れる……

便利な狸で……私と石泉畫伯の間にはいろ／＼の狸話が取り交はされた。概略は

市内某劇場の「金ツバ供へ」……金ツバを供へて頼まぬと舞台で縮尻の話、某妓が長唄會の時、生理的異状のまゝ舞台へ出て、その下に祠のあつたとも知らず妙な事があつた話、伊豫鐵道五十年史編纂資料の爲め座談會を開き其の席で衣山の狸がレール敷設の眞似の話、久米村で狸がお産の使ひの話、大洲で集金係と自轉車で狸便乗の話、八幡濱某自動車連轉手の消えた客の話等々々七變八化の眉つばものやら實際遇つた人の眞剣話やら、仲々につきない。これは此の位に打ちきつて、「松山八百八狸」に移る。

「松山八百八狸」講談やら映畫で相當のお馴染みがある此の物語は忠臣蔵の如く矢つ張り遠慮して當時の作者がいろ／＼と手を入れて居る實説と傳説と講談とを搦き交せて、次下にならべて見よう。

貞享四年、元祿十六年、寶永七年、正徳五年、享保二十年、元文五年、寛保三年、延享四年、寛延三年これで約七十三年間、此の間へ話は挿入されて行くのである。

實説の

「松山騒動」概要

吉田權兵衛ある忠臣を先づ

擧げて記録されて

居る。權兵衛は松

山の藩士

享保年間

松平定喬

に仕へて

歳百五十

石、其子

十八太も

近侍して

-1 771 43 820" data-label="Text">

忠勤を勵んで居た

が其頃老職奥平久兵衛は藩主の弟某

烏桃腺炎 12 効奏・期短・服内

錠ルジバルア

兵衛は深く考ふる所あり、表面同意して歸宅し一子、十八太に當夜の旨を物語り老職奥平藤左衛門、松本四郎、水野吉左衛門に圖り君側を護れと命じ割腹して果てた。これから藤左衛門派と久兵衛派の戦いは始まり、邪は正に勝たず久兵衛は生名島へ流され寛保二十年十月殺されて終ふ。以上が伊豫名草及松山叢談の記録で之れに關聯して「久萬山騒動」が織り込まれて居る。即ち久萬町の菅生山大寶寺四代の住職齋秀和尚が寛保元年百姓一揆を鎮定した話がある。松山藩の批政増徴を惡んで百姓八百餘人蜂起し事を隣藩大洲藩へ訴ふべく押し出した。藩の役人では手がつけられない。齋秀和尚は藩の依頼で之れを説得し、老職奥平久兵衛は配流死刑、忠臣藤左衛門、吉左衛門が重用せられ、芽出度く納まつた。まあ一つ「山内與右衛門」の話がある。與右衛門は藩の目付役で藩主の略血急逝を與平久兵衛一派の奸策と睨み罵る友豊島金十郎に意中を打ちあけ、久兵衛を討つべく決心したが金十郎の變心で、木屋町の長久寺に誘ひ込まれ、藩主の命なりとて詰め腹を切らせられた。此の靈を祀つたのが、松山市朝興町の山内神社である。それからまあ一つ、此の時代を語るものに小學讀本に

も出て居る種々の依を枕に餓死した「義農作兵衛」がある。享保十七年の大饑饉、松山藩だけで四千餘人、日本全國では十六萬九千餘人の餓死を出したと云ふのであるから思ひやられる悲惨事である。山内與右衛門の切腹が享保十八年十二月、作兵衛の餓死が十七年九月、道後湯之町に遊女許可が享保十八年十一月、寛保元年三月に久萬山の百姓一揆、同年十月久兵衛の死刑、隣國稻生武太夫の出現が寛延三年この稻生武太夫の事は昭和十五年八月十四日に廣島から及川氏が郷土傳説として放送された。田中貢太郎氏著の魔王物語に出る豪傑である。

打ち殺されて最後の時「危険な時は私を呼んで下さい」「人外の身の性來を引くからは心に心して見よ」此の歌を稱へて下さると、キツト現はれて助けます」と云ひ遺した。伏太郎は成長、名を小源太と改め一刀流東軍流を極め江戸に出て、正田道場へ稻生武太夫と相弟子になる。間もなく江戸を出て四國へ渡り、久萬山の百姓一揆から狸に出會ひ兄弟分同様に成り、これが奥平久兵衛の耳に入つて、惡へ加擔する遊女設置の申請増徴苛税、此の間狸はいや／＼乍ら小源太に頼まれて加擔する。結局忠臣連に討たれ、稻生武太夫出現神社で狸を追ひ拂ふ。或は與衛門の靈と狸の戦ひなど怪奇繪巻が此の講談の筋である。以上を實説と比較すると百姓八百餘人大洲領へ走る。齋秀和尚の鎮撫、こゝを作者が面白く狸にかつがせたものであらふ、それに田中貢太郎氏著怪奇手帳の魔王物語の筋が多少講談にも取り入れられて居る様に思ふ。及川儀右衛門氏の放送に稻生(イノウ)武太夫の妖怪退治は平田篤胤の著書にも掲載されて居るさうで、「松山八百八狸」の作者は餘程頭のいい人に違ひないと敬稱させられる點がある。こんな工合で松山地方否な四國地方には昔から狸の傳説が多い。

これを土台に築き上げた八百八狸だから興味を渺からず呼んだものだ。舞台の久萬山(上浮穴郡・松山市の隣接郡)附近でその遺蹟を訪ね調べたが、残念ながら得るものがなかつた。たゞ(温泉郡荏原村・松山市近接村)荏原郷に大宮八幡社あり其の境内に巨樹があり社殿があり金平狸を祀つて居る。「百姓八百餘人と八百八狸」「齋秀和尚と隣神刑部狸」が講談松山八百八狸の隅ひ所だと思ふ。それに備中三次郡より廣島にかけての魔王物語に活躍する稻生武太夫、饑饉、遊女許可、増税苛徴、奥平久兵衛の反逆など、材料としては充分なものがあつて、山内與右衛門の靈と狸の術くらべのところは宇和島との靈さん山家清兵衛の靈威と似通つた點がある。何やら彼やら取り交せて「松山八百八狸」が出来たものであらふ。

伊豫の狸ばなしも、こゝらで切り上げて、次は土佐へ、土佐には荒倉山の狸、最近では狸利用のベテン宗、其他こゝにも相當の傳説がある。阿波には映畫でお馴染の「阿波狸合戦」これを分類的に觀た諸傳説等澤山あるが、いづれ土佐、阿波は後日又たお話しする事として、「狸」傳説四國めぐりもこゝらでお終ひとする。狐の化け方は技術的に優り、狸の化け方は精神的に優つて居る様に思はれ、凡俗は怪異とし選ばれた人には哲學的にも宗教的にも藝術的にも又た川柳的にも觀察出來、大人のお伽話、轉じて深遠な、ある教示とも成る事がある。「狸」はユーモリスト……私はいろ／＼の角度から見て、狸が好きだ、好きなら思はず永くお話しして貴重な誌面と讀者にお慰屈をさせ相濟まぬとお詫ひ申上げ終りとなす。(終)

花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花



くれない

フロリスト

大阪市西區京町堀通り三丁目
電話 土佐堀五一三〇番

掌 簫
川 柳 たつた一言

小 畑 自 由 朗

十有餘年、中風症でべつたりと床にいたきりの御隠居さんに、俄然！ 轉起の徴候が現はれた。

と、同時に、四十からも違ふ後妻さんのおなかの恰好が、集つた親類縁者の間に大問題に成つた。

「どだいもう無茶苦茶だす」と新宅さんが憤慨した。

「新體制のやかましい折柄、こんな外聞の悪い話であつたもんやおまへん」と、新宅の新宅さんが苦り切つた。

「さうだす、これでは死んだ姉にわたしが合す顔がおまへん」と、御隠居さんの先妻さんの妹婆さんがいきなり返つて「あんたは一體どうしなはる氣だす」と御隠居さんの跡取り息子を責め立てた。

「あんな女とは知りまへんもんだすかいに」と、眞面目一方の息子が、てつべの禿げた頭を下げて詫び入つた。

「而し、まあそない云ひなはつたかて、あの若さではなあ」とつい後妻さんに同情の言葉をもらした御隠居さんの従弟の息子が、「さては」と一同から「怪しい」とうたがををかけられて「あほうなことを」と、辯解すればする程「臭い」と脱まれた。

「さう云ひなはると」と、人一倍嫉妬心の強い其の妻君が「思ひ當らんこともおまへなんだ」と、猛烈なヒステリーを起して、五人の子供と女中を連れて里へ歸つて仕舞つた。

「而し、今はのきわの親父さんにも、もう何んにも聞かしとうはおまへんさかいに」と、息子は病室の方へはら／＼とした。

「せやかて今更此處のうちへ、氏も素性もわからん様な血筋が交る様だしたら、わたえ等迄が迷惑ださかいにな」と、先妻の妹婆さんが頭として、親籍一統を代表する様にして御隠居さんの耳に驛した。

「今更こんなことをあんなに聞かしとうはおまへんねやけど」と、酸素の量をふやした。

「後妻はんの始末をどないしたもんだつしやろな」と御隠居さんは苦しい息を引き絞る様にして

「頼む」と云つた。

「でも、後妻はんのおなかになあ」

「頼む」

「へい」

「頼む」

「頼むてあんた」

「わからん奴ちや」御隠居さんは極度に顔をしかめた。息子があわてゝ唇をしめした。

「呀！そんならやつぱりあんたはんの」と妹婆さんが悲鳴に近い聲を上げた。

「は、は恥を掻かすな」と御隠居さんにはやりつと笑つて「えゝッ！」と驚ろく一同へ、ごくりと最後の咽喉佛を働かし



募集句
一路集

圖書館 葭乃選

立讀みの癖圖書館へ落付かず
圖書館は皆秀才の顔で讀み
圖書館でよいいな本を讀んじまひ
貧しさは唯圖書館を書籍とし
圖書館へ子を連れて來てもてあまし
圖書館の窓青空のもつ魅力
圖書館勤め本に麻痺した顔の色
圖書館が満員になる試験前
食ふ事に追はれ圖書館縁遠し
圖書館へ手紙の返事書きに來る
片ちびの下駄圖書館で今日も暮れ
檢定をとる氣圖書館通ひする
圖書館で又感激をもちあげる
二代目は圖書館へ寄贈すると言ひ
のんびりと圖書館へ行く合格後
圖書館へ這入る少女が眼鏡拭く
敗慘の身を圖書館へ避けて讀み
天氣晴朗圖書館は素通りし
圖書館で借りた本は借出され
圖書館は時局の本もみな揃へ
圖書館で雨の休みを棒にする
圖書館につめきつてゐて不合格
讀みたさに來た圖書館は定休日
圖書館のやうな博士の書齋なり
圖書館で離れて讀んで出た二人
これもあれも借りたい索引箱の前
咳一つ圖書館中を振りむかせ
先生がゐる圖書館を出そびれる
閲覧室火鉢が欲しい寒さなり
買う氣でも先づ圖書館へ行つてみる
(人)目禮ですむ圖書館の顔なじみ

千斗 一風 不水 石鹿 小樓 斗風 ユリエ 満山 愛鳩 九坡 灯竿 洋子 眞理子 白鷗 小城子 葉光 東狂子 愚源太 美代吉 田中 兼竹 進水 龜春 梅來 勿一 潤一 ヒデヲ 同 抱逸 美奈子

看 護 婦 春巢選

(地)司書の眼にア、あの人と顔かれ 香林坊
(天)How to Love 圖書館へ來て物足らず 風來子

看 護 婦 にお伺ひして見舞品
今日も亦看護婦だけで歸される
紅い頬持つて看護婦志望の娘
縁ついて元看護婦のうでを出し
花の水看護婦さんが代へてくれ
子の様な看護婦へふと甘える日
母でない看護婦さんにある情
看護婦に禮云ふ今宵熱のなく
看護婦も母と同じことを云ひ
年下の看護婦さんに叱られる
代讀の片假名天使なみだ聲
看護婦の若さ口紅少しつけ
スクール・ライフが戀し看護婦辭書を繰る
キユリー夫人讀んで看護婦無口なる
一樓の望みに看護婦輪血申出る
退院に看護婦へ名で禮を云ひ
看護婦の態度氣になる病上り
看護婦に頼り切つてゐる子の病氣
沈黙の中を看護婦だけ動き
靖國の夫へ誓ひ白衣着る
白衣もう爆弾に慣れ闇に慣れ
張切つた乳房押へて征く天使
(佳)看護婦の化粧淋しいものうち
(佳)看護婦のひま手袋を編んでゐる
(佳)ヒステリーへ看護婦さんもヒスになり
(佳)看護婦の財布の中に招き猫
(佳)看護婦は／＼と急を告げ
(人)看護婦に委せ切れない息づかい
(地)百合の香の劇しさ看護婦ひとりある
(天)看護婦を笑はす兵に腕がない
(軸)全快祝看護婦も藝出してくれ

惡源太 抱逸 九坡 彌生 紅多呂 洋子 静子 若菜 風來子 美奈子 千斗 ヒデヲ ユリエ 眞理子 葉光 宏方 一龜 満山 愛鳩 みづほ 小樓 對州坊 香林坊 露斗 自由朗 灯竿 風來子 ライト 不水 春巢

川協の★

★ジベージ

▼「視野」「近代」「戦場人」「巻雲」其の他で新興派合同案なるものが佐世保あたりから提唱されてゐるらしいが一寸纏りさうがない。

▼東京では日本川柳協會を結成したが各吟社の合同でなく曾ての京濱吟社聯盟の延長に類するものと噂されてゐるだけに各地に於ても東京にならへと笛吹けども踊らず、僅に神奈川縣下の柳人が隣地だけに呼應、目下のところ大阪の一部、朝鮮に多少の便乗的動きを見せてゐるに過ぎない。

▼横須賀の鈴木小寒郎氏等は川柳評論家協會の組織を提唱、同志糾合を劃しつつあるがこれは會員の獲得が至難らしい。
▼安井ひろし氏(徐州)は徐州日本商工會議所に勤務されることとなつた。(前號、放送局勤務は誤り)なほ同地で新聞記者となつてゐる出口雨氏に會はれた由。阪大川柳會の坂口芳一氏(大阪)は月中旬、舌痛の手術をして阪大病院に入院された。曩に歸還された月原宵明氏(愛媛縣)は舊多十二月一日から伊豫相互貯蓄銀行に復職された。今後川柳に精進される由。

歸還御挨拶

北支三年間の御厚情を謝し
今後の御交宜を願ひ上げます
愛媛縣越智郡櫻井町 月原宵明

★社告

▼不朽洞會新會員

ホノルル 内藤草一郎氏

ホノルル (高澤一浪氏紹介)

ホノルル 三輪晚翠氏

長崎 (高澤一浪氏紹介)

大 阪 植村九天氏

大 阪 (黒川紫香氏紹介)

大 阪 夷一美氏

▲上田耕二氏は家事多忙のため

昨多十二月限、不朽洞會を退會

された。

▼支部異動 川維葉櫻支部は支

部同人の大多數が入營、應召さ

れたので諸句會と合流し、今後

川維葉支部と稱することとなつ

た。川維北群支部は羅津府へ移

轉

柳望界

消 息

▼鈴木九坡氏(岡山)が十二月廿七日來社。潮田明坊氏(神戸)同廿八日來社。月四日夜の本社初句會に姫田夕鐘氏(徳島縣)が出席された。濱田賢次氏(下關)は入營が近づいたので、徳島縣日和佐町へ歸省された。川維廣島支部暨月例會は十日開催。川維堺支部は一月十九日午後一時から米本邸に開催。

▼石曾根民郎氏(松本)は信濃日日新聞に隨筆「蛇のあれこれ」を連載して好評を博されてゐる。なほ同紙の柳壇を擔當された。

▼龍井茂脩氏(函館)は川柳に手を染めて廿五年になるので二月二日の誕生日に記念句會を開催される由。

▼寺井銳々氏(青屋)は有恒俱樂部のスキー會で一行三十一名に參加信州の志賀高原で白銀亂舞を満喫されたのと「五千里の高原一路スキー飛ぶ」の句

▼米本貴志子氏(大阪府)の令息義之氏が海軍航空技術廠に奉職された。海の荒鷲のために奮闘を祈る。川維下關支部の國弘半休氏(下關)は舊多から眼を病んでゐられるさうだ一日も早く快癒を祈る。川維城南支部の早潮小松園へ友帆の三氏は新春早々伊勢神宮並に熱田神宮參拜をされた。黒川紫香、正本水客兩氏は下關の市多樓居で下關支部同人等の歓迎をうけ宇都へ一泊、

下關へ一泊、長崎の植村九天氏を訪ねて三人で雲仙に遊ばれた。▼森半疊氏は華北石炭販賣股份有限公司の塘沽受渡事務所長に榮轉、一月二十三日神戸出帆、塘沽へ赴任された。吉田水車氏(奉天)の通信によれば一月六日大島清明氏に面會された由、なほ五日、九日まで百貨店「満毛」で川柳展が開催され路郎主幹の短冊が柳展で出たのであつたのでしかなかったとのこと。河合白外郎氏再度應召。川維鐵道病院支部同人岩崎水虹氏應召。

▼西尾栗氏(大阪)は一月十六日女のお子さんを儲けられた。石手向上庵氏(今治)も女子を儲けられた共に祝意を表する。▼中内梨芳氏(大阪)の母堂が十二月廿四日に永眠された。謹んで悼む。

▼三鴨美英氏は朝鮮羅津府國際ホテル滿鐵生計組合へ。金政細泉氏は大阪府西淀川區塚本町二二三へ。

▼石浦征野氏(大阪)は西花園と改號された。

後記
★★★★★
本誌前號からの新しい型が、そして豊富な内容が多好の好評を博し海外からまで讃辭をいただく。携帶に便になつた、「迷信と川柳座談會」は素派らしいぞと通信に接するたびに編輯室は歡聲をあげた。それにつけても各位の御支援を深謝せずにはゐられない。

高麗亞純氏が「奥村丹治論」を寄せられた。香氣豊かな川柳詩人奥村丹路氏の全貌が亞純氏の才筆によつてこゝに解剖展開されること

となつた。
▼淺田一氏がその専門とする法醫學教室から實話「現怪奇な人間生活」を寄稿された、正しく生きることの如何に至難であるかの例證として執筆された一篇で事實は小説よりも奇なりである。
▼「月評川柳一ト筋」は柳樂、白柳子、鋭々、紫香の新らしい組合せて本號では「近作柳樓」の句のみを評した。
▼前田五健氏の「狸」は本號で終篇とされたが、更に補遺「狸」が編輯局に届けられたことを茲に豫告しておく。
▼蛭子省二氏の隨筆「旅で家で」が本號から發表せられることとなつた。博覽記の氏が縦横に揮筆筆陣「同舟近況」の新メンバーを推薦した。多年創作に精進された人々であることは云ふまでもない。
▼大號の締切を二三日早める事とした。御諒承を乞ふ。(路郎生)



日本生命

大きく確かな

保険

各地柳壇

いのちある句を創れ

投 稿 規 則

- ▼用紙は原稿用紙
- ▼文字を正確明瞭に
- ▼開催月日及掲載所記入
- ▼締切は毎月廿五日
- ▲投稿先は本社宛

本社新春句會 (大阪)

一月四日

於 三津八幡宮

出席者(順不同)

路郎・紫香・潮花・水客・鼓愁・欣一・南濃路
 孤蓬・彌生・九柳・香林坊・翠峰・桃園・沐夫
 一龜・指洋・要兒・虹蜂・ライト・満潮・小松
 園・葭乃・アイト・角堂・かほる・巳之介・顯
 たけを・安靜・鮎美・夕鐘・豆秋・紅多呂・萬
 的・晴美・古詩郎・白柳子・綠翠・一夷・塊人
 菜・銃人

席題「こわがり」

互 選

こわがりが無事に歸つてみんな寄り
 こわがりか園の相場にふれず済み
 こわがりか来て賑やかす奥座敷
 こわごとと故郷の土産の米を揚げ
 こわがりの使ひ夜道をまつしぐら
 こわがりの小供小便半分し
 こわがりかゐてつちりがふいになり
 席題「耳打ち」
 豆秋選
 紫香
 アイト
 耳打ちを一座は白い眼で見たり
 耳打ちはあんなまかせの膝を寄せ
 耳打ちはどうやら酒が切れたらし
 耳打ちの片手は指を輪にしている
 耳打ちの承知したのか笑ふなり
 耳打ちのとがつた顔になつて来る
 耳打ちの幹事ははらをきるつもり

耳打へ財布の中をたしかめる
耳打ちへつばも少しは掛るなり

席題「長 生」

小松園選

長生きの寫眞新聞社に撮られ
 此の上の慾はひ孫がみたいだけ
 長生をして地下鐵といふに乗り
 長生はし度し保険はもらひたし
 長生の人と逢ふなり天王寺
 長生の人へカメラは四方から
 長生をほめて保険をすゝめに來
 長生をして團服を眺へる
 長生へあつさり席をゆづるなり
 長生の有難く聞く鐘の音
 長生は隣組からいたわられ
 席題「時 計」
 夕鐘選
 桃園
 孤蓬
 萬的
 安靜
 かほる
 巳之介
 古詩郎
 紫香
 銃美
 白柳子
 うれしさは時計を母の腕に巻き
 正確な時計のいらぬいゝ暮し
 自慢して出した時計が止つてゐ
 大時計税關前に月を受け
 掛時計もう一人娘の手がとぎ
 また梯子かけて時計に紙を貼り
 惨劇を語る時計は止つてゐる
 待ち人は時計の見える壁へ立ち
 後家たてゝ時計の音の澄んでゐる
 神棚を釣るに時計の向きをかへ

脈の數かぞへる様な胸時計
 卒業へしかも御賜の時計組
 ぶさいくな時計を提げた阿波訛り
 夕鐘

塊人選

日歸りの滴のたれるみやげ物
 日歸りで伊勢へ詣れるとこに住み
 日歸りは隣の土産だけを買ひ
 日歸りの旅の忙しさ語る風呂
 日歸りの峠で日の出拜むなり
 日歸りの人へきれいな月が出る
 日歸りの松吹く風も聞き流し
 日歸りの朝の時間に落合はず
 日歸りは從弟の家へよりそこね
 日歸りの方が土産をたんと買ひ
 日歸りの姑さんは鍋を買ひ
 日歸りで行つて故郷の海を見る
 日歸りのやつぱりはめる内の飯
 日歸りに不似合な金持つて出る
 新體制日歸りといふことになり
 先生も疲れて歸る貸切車
 日歸りにおいしい夕陽をまだみつめ
 日歸りは陽の出る元を見て歸り
 日歸りを信じて妻は起きてゐる
 日歸りの夕陽を浴びて一家族
 兼題「年 玉」
 かほる選
 巳之介
 銃美
 南濃路
 潮花
 紫香
 彌生
 鮎美
 孤蓬
 紅多呂
 たけを



年玉のお禮に一さし舞ひにくる
十能を置き年玉の禮を云ひ

兼題「日記」

アキラ
かはる
鮎美選

苦勞した日記をみてる誕生日
伸る子へ勇士の妻の日記帳
青春の日記を繰れば椿咲く
應召の今日から私心でない日記
文章も變り轉業した日記
笑はない姉の日記の字を見つめ
闘病記きれいな文字で書かれたり
日記帳愛人涙して坐り
おじぎされた事を日記につけて置き
日記帳双兒が出来たあわてやう

香林坊
潮花
沐夫
晴美
葉光
潮花
紫香
満潮
かほる
夕鐘

川 廣島支部四週年記念句會 (廣島)

大森風來子報

神殿を裏から見れば近いとこ
銀行の裏で小使夫婦貯め
樂屋裏まだ給金の出ぬ話
裏長屋過去を語らぬ人が住み
裏口の雪を産婆はゆつくり來
裏塀でほんとの母に逢うて來る
裏棚にくたびれきつた俺の影
人生の裏正直へ冷たすぎ
眠たさと今戦つてゐる睫毛
人形の睫毛淋しく暮れる部屋
まつ毛バチ／＼姉の見合へ來て坐り
睫毛一本この人形を活かしたり
膝ばかり見つめる睫毛濡れており
睫毛ふと上ぐれば夢を見る瞳
勢揃ひ祝應召が先に立ち
勢揃ひ焚火は高く／＼燃え
どれも皆死なせない勢揃ひ
跣足で來るへ手を振る勢揃ひ
兒を負ふたモンベも交る勢揃ひ

美彌坊
春巢
伯峯
同
水客
笛六
露斗
久米雄
春巢
蟻蜂
風來子
志峰
一三
柳太
久米雄
紫浪
柳太
俗善薩
月浦

大陸で果てる覺悟の勢揃ひ
勢揃ひ河豚提灯が目にとまり
沈黙のみな線香の火を見詰め
試験管並べて息をひそめたり
沈黙を母は善意に解してゐる
沈黙のまゝで歸つた不賛成
親のない小學生がまた黙り
沈黙の何時かは言つて見る覺悟
沈黙の父の額の皺の數
沈黙を守り男としての責め
母の眼は涙黙つたまゝ叱り
佛壇のおはぎ甘黨だつた父
甘黨は早壽司にする茶を貰ひ
甘黨の齧々猪口を受けは受け
甘黨の方はサイダーではずんで
甘黨と甘黨所在なく坐り
甘黨の膳サイダーが配られる
甘黨でこんどは通す氣の赴任
甘黨のそのまゝ不平なく別れ
受話機持つ手が震へて一大事
電話でははつきり言へぬとこで切り
君電話しますと言つて逃げる氣か
名刺には借電話とは書いてなし
二通話を頼む財布があわてたり
長距離へ出た女房を押しつける
背伸しても一度電話へ念を押し
借電話話し足りないのを戻り
公用でない電話口二人たち
挑戦を笑つて受けるいゝ度胸
挑戦へ案外腹が出来てゐる
挑戦の心豊かに墨をすり
挑まれて武士のつらさの太刀を抜き
挑戦へ勝てない譯を一人知り
挑戦をお預けにして下駄をはき
初めから喧嘩する氣で坐りこみ

久米雄
市多樓
春巢
蘇堂
風來子
江波
久米雄
美彌坊
露斗
幽香里
久米雄
須彌浩
月浦
九坡
幽香里
九坡
秋無草
同
水客
金十
江波
市多樓
秋月
久米雄
月浦
風來子
月浦
俗善薩
理公
幽香里
久米雄
江波
笛六
俗善薩
麗美

挑戦もいゝが雀が遊んでゐる
筈台はあと何枚の十二月
十二月繰越すことの多いこと
十二月日記は買つて置く積り
十二月どうにかならう懐手
十二月だのに女の長話
悪い日に日曜がある十二月
金貸が歩いてゐる十二月
物言はぬ男になつて十二月

川 今治支部句會 (今治)
十二月二十日

於今豫貯蓄銀行
長野文庫報

厄年の終りを風呂で喜ばれ
死の曲馬終つたとこを外へ見せ
あと三月すれば制服ぬぐ私
二週目は終りから見る住所録
終りまで聞かず善人腹を立て
終點と云ふ安心か軒かき
浪花節終りをなぜにそう急ぐ
カレンダー新春にして共稼ぎ
來年は來年はとて日記買ふ
來年も強く生きる氣貯金帖
天つ祝詞語尾は社殿の奥に消え
終點へあせらず降りたふところ手
甲子園來年來いと同情し
來年の家計を組んで見る夜長
易學により來年に延期する
男の子木切れの端が鈍に見え

川 竹原支部句會 (廣島縣)
一月二日

於芳郎居

梶川芳郎報

注連繩があり楠も神々し
初手柄故郷の母に先づ報せ
藤簪へ初穂捧げてつゝがなし
初奉公初めて乗つた汽車汽船

川 下 關 支 部 句 會 (下關)

國弘半休報

乾杯もよし日獨伊の誓ひ 市多樓
 佛の間に母と並んだ赤だすき 正治
 うちかゝる瀧は靜座にはね返り 賢次
 無我の境ふと盲念が忍びよる 同
 妥協して力を入れる新體制 三方
 妥協してくれと世間の義理を説き 賢次
 妥協まで行かぬがお茶を進めけり 市多樓
 お互に儲かる様にして妥協 米三
 ちぐはぐの心も捨てゝ國の爲 草路
 奉祝の列騎馬隊のものゝし 半休
 そよゝとアカシヤ揺れて騎馬が過ぎ 九呂平
 そよ風へ騎馬は步調を忘れてゐ 半休
 開拓へ村長さんが鉄始め 市多樓
 この土と生きる覺悟の鉄をとり 不川
 顔色を見て肝腎な話をし つづる
 肝腎な所で明日と浪花節 山彦
 肝腎な事を忘れた子の使ひ 柳月
 同乗の異人をそれとなく見張り 不川
 五分五分の口がきけない貧苦に居 九呂平
 老眼に化學の力迫つて來 同
 新聞に目を光らしてゐる銃後 賢次
 小ざかしき狐尻つぽを振ればとて 不水
 井戸端の會議も今は支那の空 みつる
 出征に見知らぬ人の振つた旗 光輝
 日獨伊叫ぶ世界の 新秩序 あきら
 バルカンはずと睨んでおけばよし 同
 名案は旅の空にて浮んで來 蘭京
 名案は社長の次の人が出し 賢次
 名案の結局損をしたばかり 市多樓
 名案に社長も異議の無い署名 不川
 名案も結局金の事に觸れ 賢次
 切り抜けた顔で運蕎麥戴く氣 潮流

川 鐵 道 病 院 支 部 句 會 (大阪)

十一月十五日

於派出診療所醫局

二次會の財布蕎麥代拂ふだけ 半休
 親より孫より平和な蕎麥の味 默笑
 復活の門出上衣を着せかける 九呂平
 復活が人夫募集のビラ貼り 殘月
 ガソリンのいらぬ車が復活し 比呂志
 復活をする氣へ過去が付きまとい 賢次
 常會にモンベ姿も中に見え 正晴
 常會へ重ね着をして風邪も行き 白陽子
 人の智慧借りて常會何か言ひ 米三
 常會に肩書捨てゝ打ちとける 草路

身の上はみんな哀れなバスケツト 柳太
 身の上を話せば長い酒となり 紫香
 身の上を聞いてやる手を火にかざし 某人
 魚にも身の上がある傷を持ち 骨減
 老産婆祖母の代から試験済み 水虹
 不義の子と知らず産婆は如才なし 某人
 揃へられたるは産婆の下駄ばかり 久枝
 奥様に産婆の年が氣に喰はざり 春巢
 産婆も自分も産まぬ積りなり ス、フ入りのズボン坐るに骨が折れ 夕がほ
 よれゝのズボン旅から戻つて來 久枝
 パラ銭の音がズボンにする若さ 水客
 替ズボン間借りる壁に一つ吊り 風來子
 名優の瞬目を見た貸眼鏡 春巢
 座談會詛を隠し切れぬ人 風來子
 若い妓の年に似合はぬ聞き上手 嘯川
 云ふ事がもう決めてある座談會 水客
 座談會隅の方からきつい洒落 万的
 座談會何んにも云はぬのも坐り 風來子
 座談會茶柱立つた茶を貰ひ 春巢
 座談する横へ名刺が一つ來る 紫香

川 松 江 支 部 同 人 會 (松江)

十二月三日

於祥月居 勝谷山川兒報

軍艦が來て生徒等を引率し 豹
 知事夫人女中と同じモンベなり 同
 國葬へ勅使眞直ぐ通られる 笑鬼
 花道でアンパン賣が邪魔になり 同
 國葬へ今日の坐漁莊靜かなり 祥月
 虎造は泣いた觀衆みな泣いた 同
 軍艦は引き受けたりと浮かんで居 莞路
 軍艦の或日鯨と出會つたり 糸葉
 國葬の日の榮食の夕御飯 都之介
 花道へ皆右向けの型になり 同
 十二月ヒステリツクに銀貨落ち 柳人
 花道へライトを向けて主役出る 同
 錢別に家主解つた人なりき 山川兒
 錢別も返したい程世話になり 同
 竹簾へ來て人生を考へる 柳人
 片親に馴れて坊やはよくねむり 祥月
 何と云ふ固い握手だ日滿華 都之介
 影法師までも小心者となり 專太郎
 片親があつて氣強い赤澤 大鳥
 十二月妻の理想に勵まされ 登美也
 金庫の戸天の岩戸の様にあけ 一湖
 外交員ちぎれかゝつた早見表 笑鬼
 居ねむりをおこし合つてゐる老夫婦 俊治郎
 坂道でバンクしそうでバンクした 山川兒

川 豐 中 支 部 句 會 (豊中)

一月四日

丸尾潮花報

見本だけ見て相談をしに歸り 競舟
 年頃の化粧見本なぞ集め 潮花
 靴はいてくたく水のおもしろし 鼓愁
 濯水按摩の杖にもろくわれ 紅多呂



手洗は落華をのせたまゝこほり
 薄水の下は海までつづく音
 母親も白粉つけて見る見合
 壹等入選伸びる氣持を失はず
 看護婦の白粉きつく眼にしみる
 半日を裏の野原でころんで来
 半日を前賣券へ立たされる
 新家庭の筆筒がよく目立ち
 左前見せぬ家庭の應接間
 母一人子ひとり葱も少し植え
 水盤の薄埃りして留守つづく
 窓の隙から霧がまひ込む山の朝
 朝の呼吸空はきれいな日本晴
 たまさかの朝寝を病氣かと問はれ
 窓近く雀が鳴くも故郷の朝
 一番で出て職業がよく變り
 天秤なら一ミクロンも疑はず

潮花 萬的 紫香 潮花 草水 競舟 風葉 紫香 鼓愁 水客 同 萬的 花笑 霞乃 同 風葉 アート

南風、雪原入營送別句會

十二月八日

日の出する中爆撃機歸つて来
 軍艦旗日の出の色をあびてゐる
 日本日の出最後ときめて征く
 萬歳へ女も涙なぞ見せず
 萬歳の聲に思はず堅くなり
 萬歳の聲大陸は朝となり
 萬歳へ鯨は白い腹を見せ
 萬歳の波へ無口な歸還兵
 萬歳は心置きなく發てと云ふ
 萬歳で死ねる男だ二十一
 萬歳へ新聞記者の顔も見へ

雪原 美竹 競舟 水仙 双葉 太洋 みのる 鼓愁 南風 秋星 潮花

川 布哇支部句會 (ホノルル)

十二月二十七日

於日布時事社
 前山北海報
 幸運の神よ少々待ち給へ 一浪

未亡人幸麟が身を助け
 不仕合せな魚に生れ釣られて来
 揆だこがしあはせにした絹團扇
 幸せが待つてゐる様に神を説き
 幸は二男一女と云ふ子持ち
 獨身へある日の幸が感じられ
 茶柱だ幸先よいぞ今日の賭
 多なのに向向に寝てゐる幸ハワイ
 二時三時送り出されりや銀の星
 一人にも我子にあらず君の桶
 親しめば土には土の聲がする
 爪弾きへスピーチ攻めの妻を逃げ
 處女を賣りものにする酒を注ぎ
 君故に今日も三時を打つて出る
 使ふすべ知らぬ金など貯めてゐる
 親の無い子の利澄さといじらしや
 半獸と云はれ神様とも呼ばれ
 高澤老に呈す

北海 魔花麗 草一郎 木公 晚翠 無有 同 風竹 同 北海 魔花麗 友郎 同 晚翠

風便り十年も見ぬ子を思ひ
 母なれば風の便りに涙する
 風流が身を喰ふ粹の成れの果
 寒風を二世に一度感じさせ
 こりはてたことを腦が忘れさせ
 平靜を装ふシガーの手が震ひ
 平凡な日記が續き子は太る
 ふぐりへあの頃の通振り廻し
 咲いた夢洞んだ夢の五十年
 酔めざめへ又思はする故郷の母
 親の子と言はれゝて死にました
 病付きは街で拾つたチラシから
 新橋で持てましたとの土産談
 旅の夢家内中の顔みんな出る
 物思ふ窓邊に白くジジヤ咲く

木公 同 快夢起 長洲 一浪 友郎 風竹 草一郎 快夢起 山石 魔花麗 同 北海 伯樂 沙兆

中内翠芳報

四ツ橋支部句會 (大阪)

ストープの話題に皆が寄つて来る
 ストープでウツラ／＼と夢を見る
 ストープが何時消えたのか好い日和
 ストープで課長の留守は賑はへり
 生命まで賭けてはいない節季が来
 ストープが未だ出ないかと老社員
 笑ひ聲課長の顔に急にやみ
 晩酌の父はみんなを笑はせる
 雪見酒今は昔の語り 草
 すぐ消える雪へ都會の子の不足
 北陸は又炊出しの雪崩れ
 年の暮スフの晴着を買うて縫ひ
 年の暮仲居はひまをこぼして居
 年の暮餅搗臼が引ばりこ
 年の暮父の氣持ちを知りもせず
 年の暮無理聞いてやる様になり
 國債も買つて嬉しき年の暮

腦留守 秀甫 翠芳 靜峯 輝翠 綠雨 山人 綠雨 夢想 美奈子 夢想 秀甫 朗舟 靜峯 防風

35

不朽洞會員

支部と幹事

募
集

第十八卷 第四號課題

(十句以內)

眼前病金
矢藤本蘭華選

第十八卷 第五號課題

十句以內

靴 共稼ぎ
高須啞三味選
長野文庫選

第十八卷 第六號課題

（十句以內）

代用食 純綿
福田山雨樓選
姫田夕鐘選

每號募集
(每月五日締切)

近作柳樽(雅吟)
川柳塔
麻生路郎選
麻生路郎選

同舟近詠
名也卿壘（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原紙に各種各題必

ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳梅」は全作家の雑吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雑誌京

稿)と封筒に朱記の事
締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

川柳雜誌
第十八卷
第二號

每月一回一日發行

定 一冊 金三〇錢 (送料)
半年・六冊 金二圓八錢 (特輯)

價
一ヶ年・主冊 金三圓半錢 (特輯)
外國送本には海外部送料實費の加算を
(共)

乙二

ひます。御注文は何月就よりと御指示願

ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十六年一月廿五日印刷

日
元
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

禁無斷轉載 本誌の刊行は有保
證新聞紙法に據る

本志廣告に卯月の帝は川卯

本誌廣告は御月の節に月刊
雑誌社廣告部へ御一報下さ

いすやうに

發行所 川柳雜誌社

目四六番地（昭和ビル）

電話土佐堀 三三三番
八一六三番
八四三番

大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地

麻生幸二郎

(大阪)福音社 百貨店書籍

別賣部 明文堂 朝日ビル書店
其他 市内各書店

東京堂 (神戸) 米

店 田寶文館 (函館・石塚)
(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

アサヒビール

大日本麦酒株式会社

含有滋味が
云々されて
更に愛飲される
アサヒビール
の眞價！

防炎消火唯一の發明品

消防帽、旗

カタログ有り



製造發賣元

加藤旗徽章店

大阪市南区本橋筋五丁目四番
(戎町交點半丁北入西側)
電話④七四七二・六二五五番

菊正宗



株式会社 本嘉納商店

ガラス壺代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・

組立式各種・藥品・食

料品・菓子等の容器と

して最適



大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 四一〇四番
戎 四三〇二番

にきびと

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！
然ういふ時にも不思議なほどよく効きま
すので、殊に小さいお子方のある御家庭
などには殊の外重寶がられてゐます。
▲ニキビ吹出物に非常によく効くの
で大評判の薬です。ニキビや吹出物
でお困りの方に大きな喜びの糧ノゼ
とお勧めしたい薬です！
▲定価一銀四十銭・六十銭・一圓廿五銭。全調薬店にあり



ニ	吹	ぜ
キ	出	ヒ
ビ	物	此
。	に	薬

東 京 ・ 大 阪
桃 谷 順 天 館